明治三十年九月五日發行

女鑑



第百四拾號

東京國光社

女鑑第百四拾號

目録

横笛



女鑑　第百四十號

うはべにのみ流るべからず

よろづの事、うはべに流れぬやうに心がくべし。高等の學校に入りて、高等の敎育を受くるにも、唯、高等學校の生徒の名簿に、その名を留め、日每に衣裳をつくり立てゝ、立派なる校堂に上り、徒らに、高尙なる書に對ひ、高尙なる器具を手にし、高尙なる事物を見聞き、高尙げなる事をいひさやぐのみにては、これ、やがて、高尙なる敎育の表面といふべきものにて、眞に高尙といふべき所にあらず。斯くの如き女子は、單に高尙なる敎育の外形をまねぶのみにて、眞の高尙なる敎育をまなぶ人にあらず。されば、たゞに高尙なる外形を有てるのみにて、眞に高尙なる人にあらず。斯の如き表面に留まらずして、心から高尙なる敎に立ち入り、心から高尙なる人と成らむやうに心がくべし。さあらずしては、高尙なる敎

育を受くるも、何の益も効もなし。たゞに益なきのみならず、高尚なる外形をまねぶのみにては、なか〳〵に、身をあやまり、家をあやまり、世をあやまる本なるべし。

高等の教育のみにあらず、一藝を習ひ、一技を學ぶにも、唯、うはべに留まりたるにては、いかでか、其の道に達するを得べき。心から、その一藝一技に入りてこそ、その道にも達すべきなれ。

ものを學ぶのみにあらず。家に在りて、女子が朝夕の務めも、また、うはべのみにてはあるべからず。心からこれを務めざるべからず。親に柔和しく仕ふるも、心から柔和しく仕へざるべからず。うはべのみにてあらば、つまりは、不孝の女子なり。良人にまめやかにかしづくにも、心からまめやかにかしづかざるべからず。うはべのみにてあらば、つまりは、不貞の妻女なり。家を正しく治むるにも心から正しく治めざるべからず。うはべのみにてあらば、つまりは、正しからざる家婦なり。子供を善く賢く育つるにも、心から善く賢う育てざるべからず。う

はべのみにてあらば、つまりは、悪しく愚かなる母たり。詞のうはべのみ美はしければとて、誠の美はしき女子にあらず。心から美はしからざるべからず。行ひのうはべのみ正しければとて、誠に正しき女子にあらず。心から正しからざるべからず。衣服のうはべのみ錦なればとて、めでたき女子にあらず。心から錦ならざるべからず。住居のうはべのみ金殿玉樓なればとて、やんごとなき人にあらず心から金玉ならざるべからず。

おのれ一身の上のみに非ず。おのれ一家の上のみにあらず。社會の上に立ちても、また、おなじ。人に交るには、心から交るべし。人を愛するには、心から愛すべし。人を惠むには、心から惠むべし。人を教ふるには、心から教ふべし。人を助くるには、心から助くべし。さなくして、うはべのみにてあらば、誠に人と交り、人を愛し、人を惠み、人を教へ、人を助くるに非ず。然るに、世上の人を見るに、多くは、表面のみにして、心からなる人少し。

而して、此のうはべなる振舞は、反て、今の世に文明の進歩を誇れる國々に多き

が如し。かゝる文明國は、即ち、うはべの文明國にして、眞の文明國にあらず。あはれ、我が同胞の女子よ。吾人等は、かゝる表面に留まらずして、心から美はしき人となり、心から美はしき事を爲し、眞に美はしき文明國を作りて、今後の世界の文明の手本とこそ成るべきなれ。



論説

日本女子大學設立に就きて（第百參拾七號續）

文明童子

然れど、此の大學は、日本女子大學と、立派に日本の文字を冠らせたれども、主唱者の實歴より觀る時は、此は唯表面上の空文字にして、其の本意は、要するに、純然たる耶蘇教女子大學を立るに在らざるか。然るに、此の女子大學の設立に就きて、其の賛成者に加列せられたる貴顯紳士の夥しきは、實に驚るゝ程の事にて、中には貴夫人

等のみの賛成に止まらず、當時の要路に立る丶方々にして、其の名を表はし、之を賛成せられたるも少からざる事なるが、此の諸君は、童子の如く、彼の女子教育と題せる書を熟讀翫味して、主唱者の本意を言外に隱して縷述せる、文面の外に目的を有する事までを洞察せられて後の賛成なるが。童子は甚だ之を危むなり。諸君は、孰れも多端繁忙を極めらる丶方々なれど、恐らくは、童子が始め此の書類を一見して、大に同情を喚起せられたるもの有りしが如く、諸君も一見せられて、彼の主唱者が、耶蘇教の爲に、深く考へ遠く慮りたる陰險手段の、此の中に埋伏し有るまでには思ひ及ばされずして、唯、方今女子の教育には、頗る必要を感じつ丶有る折節なれど、所謂渴する者は飮を爲し易きの古語の如く、忽ち之に響應せられたるには有ざるか、童子は甚だ之を奇むなり。

諸君にして、童子が今述たるが如く、彼の女子教育の書たる、表には千言萬語を連ねて、如何にも深切に、如何にも叮嚀に、我か國家を愛念する如く縷述したるも、其の裏には、此の學校に於いては、奉教の自由を實在せしめ、宗教教育を實施し、剩へ、其の宗教教育より、家庭に衝突の起る事あるべきも、這般の衝突は、只一時のものにして恐る丶に足らざるべしとまで預言して、主唱者が、多年從事し來れる耶蘇教を普及せ

んとする一致場に充んとの計畫なるが如きを熟知せられての賛成ならむ、童子等又何をか言はん。然れども、彼の賛成者の多數は、恐らくは、其の主唱者の目的の存する所を見ず、唯其の言の國家に忠實なるが如きを喜び、單に之を信じての賛成ならんか。後日に至りて、意想の外に頗る不快を感ずるも、之を取り返すの法なく、後悔臍を嚙むも亦及ばざるの日無きを保す可からず。是、童子が默することを能はずして。一言を呈する所以なり。

然れども、口は重寶なるものなり。自己の不利益を感ずる事有る時は、其の良心に背きたる事も云ひ得まじきにも非ざれど、主唱者の實歷判然として、我は耶蘇敎信者に非ずと云はんと欲するも、云ひ得可からざるにも拘はらず、種々に陳辨を試み、吾人の所謂宗敎敎育と指せるは耶蘇宗敎の敎育に非ず、人間一般に通有する宗敎心を培養するに外ならず。然るに、舊來の經歷より推して、奉敎の自由を實在せしめんと云へるを、耶蘇宗敎を布演せん爲の詐言の如く云ひ立らるるは、頗る寃罪なり等と云ふかも知らされども、さり迚は、女學校の宗敎敎育上より、何故に家庭に衝突の起るべきを氣遣ひ、這般の衝突は、一時のものにして恐るゝに足らずと云ひたるか。是、主唱者の心頭に實在する何宗敎かは知らずとするも、我が國家に固有する道德に違反すべ

き、一種の宗教教育を以て、女子大學の學生に注入せんとの目論見あるは、蔽はんと欲するも蔽ひ得べからざる事實に非ずや。如何となれば、我が國固有の道德に背戻せざる、人間一般に通有する德義心を培養せんには、家庭は彌平穩なるべきも、其の衝突の起る可き理由なければなり。然るを、彼、人の問ひたるに、も非ざるに、自問自答して、宗教教育に因て家庭に衝突の起る事までを云ひたるは、彼が心中には、必ず、我が國家在來の德義に反對せる宗教を、我が國に擴充せんとの奸策有るは、蔽ふ可からざるを自白したるものと云ふべし。

元來主唱者は、其の趣旨書に於いて、女子も亦國家の臣民なれば、明晰なる國家的意識を懷かしめ、英、米、佛、獨の女子に非ずして、日本婦人として特性を備へしめ、云々と云ひたれど、此の女子大學は、日本婦人たる特性を備ふる女子を養成する學校ならずや。日本婦人たる特性を備ふる女子を養成する學校にして、何の爲に奉教自由を實在せしめざるを得ざるの必要あるや、何の爲に宗教教育を實施せざるを得ざるの必要有るや、奇も亦甚しと云ふべし。若、此の女子學校にして、奉教の自由を得せしめ、宗教教育を施さしめ、以て主唱者の目的の如く、耶蘇信徒を養成せんには、夫こそ、英、米、佛、獨の女子を造るものにして、何に因てか日本婦人の特性を備ふる女子を養成

することを得ん。其の言の前後矛楯を呈すること、宛ら西行しつゝ有るもの、我は東行するものなりと云ふに異ならざるを知るべし。此れ奇なるの甚しきものに非ずして何ぞや。眞實我が國の婦女子に、我か國家的意識を懷かしめ、英、米、佛、獨の婦人に非ずして、日本婦人たるの特性を備へしめんとせば、別に奉教自由の必要も無ければ、又宗教教育を施すの必要も無く、唯、嚮に、我が
聖上の、我が國家教育の精神として、下させ給へる　教育
勅語の有るあり。此の
勅語を奉して、我が
皇祖　皇宗を敬ひ、我が國家固有の德義心を培養し、高尚にし、滿足せしめ、以て德育の基礎となさば、我が國の道德を圓滿ならしめ、皇威を擴張し、四方を風靡するも何の難きことか之れ有らん。現に主唱者の主唱する、奉教自由を未だ實在せしめず、所謂つきの宗教教育をも未だ實施せざる今日に在て、我が國光は、年を逐ふて益々世界萬邦に輝きつゝ有るに非ずや。然るに、何を困んで、奉教自由と、宗教教育の必要を說くや。其の心裡の奸術、云はずして明白なるのみ。

童子今猶一言を呈せんに、耶蘇教の正邪曲直を研究するは、自ら別問題にして、爰に之を論ずるの必要なければ、今之を云はずと雖も、特り耶蘇教のみに止まらず、假令

何教にもあれ、他の宗教、即、我が國固有の道に非ざる、所謂外教なるものを以て、我が國に蔓延せしむるは、我が國の不利益なること、多言を要せずして明かなり。其の故如何となれば、凡そ宗教なるものは、個人の精神を支配するものにて、彼の技術器械の類のものと同一視すべきものに非ず。技術器械の類のものは、此を我が國に採て用ゆれど、我が國の用となるものなれども、宗教は乃ち然らず。其の技術器械の類を用ゆる人類の精神を支配せらるるものなるを以て、一たび誤りて彼に入る時は、之を取るに非ずして、却て彼に取らるゝに至るものなり。今、其の一二の例證を擧ぐれば、緬甸の英國に併呑せられたるが如き、安南の佛國の保護國とせられたるが如き、其の始め皆宗教の關係より起らざるは無くして、其の元人種の異なるにも拘はらず、彼の宗教に入れるものは、同宗教を親むの故を以て、彼に加擔して自己の同種族をも敵視し、却て彼に與して之を倒し、以て自國を滅亡せしむるも敢て顧みざるに至るものなり。即、緬甸の亡國となり、安南の保護國とせられたるが如き、皆是なり。近く彼の布哇の女王の廢せられたるが如きも、他に非ず。其の元、米國宣教師の來りて、同國を開進せしめんことを説きしを信じたるより、彼の教を蔓延せしめたる結果、竟に爰に至れるものなり。外教を自國に蔓延せしむるの不利益、實に云ふを待ずして明白

なりと云ふへし。

既に今回の日本女子大學の主唱者の如き、正しく日本人に非ずや。即、吾人童子等と同血脈同種族の人類に非ずや。其の同血脈同種族の日本人にて有なから、正面より、我は耶蘇教の信者なり、耶蘇教の爲に女子大學校を起すものなりとは云はずして、其の名は、之を日本女子大學に借り、一見國家に忠愛なる樣にして、裡面に奉教自由宗教々育など云へる簡端なる一言を以て、我が純良なる同胞姉妹に、國體に副はざる外教を注入せんと企てたるは、此れ他の例證を待を要せず。既に同宗教の故を以て彼を親み、同種族の我を疎んずるの事實を呈したるものにして、其の結果の恐るへきもの有る事、推して知るべきのみ。

然りと雖、人誰か、其の國に生れて其の國土を愛せざるものあらん、其の國を愛するもの誰か、その國を覆り、その土を滅はすことを希ふものあらんや。希ふものなければ、斯の如きものなき筈なるに、實際これあるものは何ぞや。他なし。或る迷信の爲に、其の天賦の良性を蔽はるればなり。而して迷信益々强ければ、良性彌々沒して、遂に國家を顧ざるに至る。豈、恐れざるべけんや。

此の主唱者の如きも、恐らくば、此の迷信に陷りたるものなるべし。されば、此の迷

信の中に在りて、如何で、眞正の我が日本女子敎育を成さんとするも得んや。主唱者、若、眞正の日本女子大學を立てんと欲せば、宜しく向後十年 専心一意、大に我が國の古史を徵し、國躰を考へ、猶、明治二十三年 畏くも
聖上の下し給へる 敎育 勅語を、朝夕謹誦せよ。斯の如くにして後、深遠の意義能く其の肺腑に入らば、主唱者の迷夢初めてこゝに醒めん。日本女子大學の設立始めて此の時に云ふべきのみ。

童子が本論の帽頭にいへる、山師詐謌師の事、直ちに主唱者に在りといはず。然れども、迷夢未だ醒めず、徒らに異敎に心酔せるものをして此の擧に當らしめば、其の害毒、たゞに、山師、詐謌師の比ならんや。實に、國家の安寧を害し、秩序を亂さずんば止まず。豈、深く怖れざるべけんや。

若、又、主唱者にして、胸中一點の邪心なく、毫も已の爲にするにあらず、又耶蘇宗布演の爲にあらずとせば、至極結構なることにして、童子の如きも、兩手を擧げて此の美擧を賛すべし。されども、童子は、主唱者の經歴、及言ふ處に徵して、此の疑を解くこと能はず。實に國家の爲に憂慮に堪へず。何を以て之に同意を表するを得んや。特り童子が不同意を表するのみならず、我が國家に忠實なる諸君が、忠實を以て之を

賛成せられて、却て彼等の爲に、其の與し易きを輕り、一笑に附し去らるゝ事無や否やを思はざる可からず。爰に至りて、遂に默すること能はず、蕪言を呈して以て、愛國忠良の諸君に質す。乞ふ之を了せよ。

女子敎育一斑（四十八）

三輪田眞佐子

讀書　貝原益軒の愼思錄に、當時の學弊を論して、讀レ書學レ文之事常多、愼レ德力レ行之功常少。あるは、其文字雖下間有中可レ採者上其人猥陋可レ賤而已矣。とあり。今の世なは、これより甚しきものなきか。大にあり。由りて、女子の讀書につきて、聊かものせん。

凡そ、文字は、思想を表す符號なるをもて、讀書の目的は、文字に由りて、先覺者より有用なる智識を得、將た、有德なる敎訓を受くるのみかは、生存上日時の便益を計るにあれど、老若男女を問はず、及ふべくは、同一の文字を流用することそ國民の幸福なれ。

然るに、わが國には、種々なる由來のため、現今、假名、漢字、及ひ洋字の三種流用せらるれども、日本國民につきて、最も樞要なる讀書は、日本語に限るべきものにし

て、他國語は、ある目的のため、止むを得ず研究するに過ぎずかし。

そも〱、日本語の特色は、語格、及び主辭賓辭の位地にしあれど、たとひ數多の漢字を交へ、若しくは、ランプ、ピン等、既に慣用せし洋語を加ふるも、日本語脈の變せざる限りは、日本語の資格を失はざるものと言ふべし。若、單に、文字を以て日本語と他國語とを區別せんには、最早、われには、日本語なきに至らん、などか、さる理はあるべき。

古語拾遺の序に、上古之世未ㇾ有二文學一貴賤老少口相傳、とあり。されど、平田篤胤翁などは、われには、神代既に日文ありけんと説きけり。げにや、太古より、一種の象形文字ありしは、各處の地中より往々發掘せるものに徴しても明かなれど、此を用ゐしは、只、一隅の間に止りて、一般に通用せしにはあらざりしが如し。されど、五十音の音律は、此の時よりやゝ整ひしものなりけんも、歴史上明に文字を認むべきは、漢字の傳來に基かんか、ろは　崇神天皇の御宇、任那の蘇那曷叱知の來朝より始りけん、奈良朝に至りては、日本紀、古事記、及び、萬葉集など、漢字を假りて志るしゝなり。その後、弘法大師の始めしと傳ふ平假名、及び吉備眞備の作りしといふ片假名も、漢字を節略して成りけん、されど、わが國の文字は、漢字と離れがたき因縁あり

て、既に因襲の久しき、わが國字は、漢字と等しといふも可ならむ、唯、國語の骨髓なる語法は、幸にして固有のものなれど、勿論、わが、國語が漢化したるにはあらで、たゞ、彼の文字を採り用ゐて、我の意志を顯はするに便せしのみ。

況して今日は、わが祖先の墓標も、國民の姓名も、漢字を用ゐ、あるは法律に、文學に、漢字を去りては意義明了ならざるべし。されど、その發音などは、既に和化せしのみならず、詩文なども、返り點に從ひて讀むため、文體こそ漢語脈なれども、和譯せしものと同樣なれど、詩の平仄、及び韻字などは、秋毫ばかりも効能なきこと、さながら、新躰詩を見るが如し。これ、亦、漢文の和化せし例ならん。故に、今日、專門家は、別ならむも、普通教育に於いて、漢文科といへど、語弊ありて倣大しけれど、單に讀書科として、和漢文を共に學ぶべきものとおもふなり。

土佐日記に、をとこのすてふ日記といふものを、女もしてみんとするなり。とあり。なべて、その頃は、漢文を以て事を記す風なりしかど、女のみは假名を用ゐけり。從ひて、漢文を男文字といふに至りたり。そは、深き理由ありしか。思ふに、今日、洋學を修むるものは、先づ男子なるが如く、當時漢文を學びしものは、先づ男子にこそありけめ、そは、おのづからなる順序なりしならむ。されど志ある女子は、なほ、漢籍

を修めけんは、女流のものし丶歌文を見れど明なり。一例をあぐれど、頭中將が、蘭省花時錦帳下てふ白氏文集の句をかきて、清少納言のもとにつかはしゝとき、承句なる廬山夜雨草庵中、の心をとりて(草のいほりを誰かたづねん)と返しゝ如きは、漢籍に熟達せし証なりけり。されど、枕草子などは、字こそ假名なれど、漢籍の學力なきものは讀むあたはざるべし。

勿論、むかしの女子が、漢字を修めしは敎訓の必要のみにて、文字を知る必要はなかりけんも、今日は、敎訓、文字共に必要とはなりぬ。見よ、學校の敎科なる、地理、歴史、あるは物理、化學などさへ、漢字を讀む能はざるものは、とても修業する能はざるべし。亦、漢字を讀む學力なきものは、新聞、雜誌は更なり、往復文すら辨ふ能はざらんを以て、良人に內顧を患なからしむるとか、あるは補佐するとか言ふは、全く空論に歸せん。されど、今日は、女子とても、相當の讀書力を養ふこそ肝要ならめ、などか假名のみを以て安すべき。

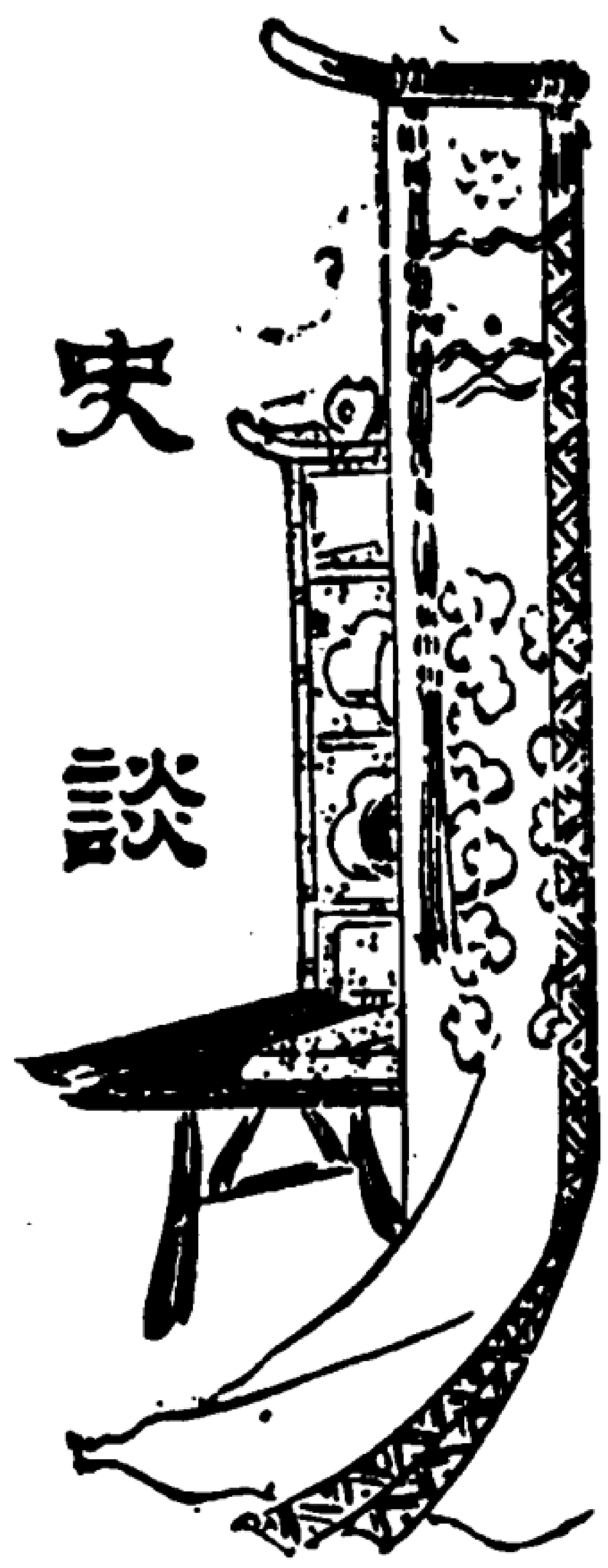
獨り怪むべきは、現行高等女學校令には、漢文を隨意科となすにぞある、そは、筆硯を與へずして、能書を望まんが如く、讀書力なきものに、種々なる學科を授けんとするは難きかな。

漢文を隨意科とするも、國文ありて讀書力を養ふに足らんといふ説あれど、德川時代なる漢學家のかきし國文は、漢字多きを以て、讀書力を養ふ材料とならむも、中古以前の國文は、今日となりては、死語に屬するもの多ければ、これを學ぶは、さながら他國語を學ぶと等しき困難こそあれ、そは、日本古文學として、普通教育以上にて學ぶは、一國の精華を發揚する理なれど、いと良きことながら、社會現今の實用的讀書力を作るは、國文のみにて望むべからず。況して、國文は、方丈記、徒然艸は更なり、三鏡などの歴史さへ、佛教の無常厭世なる趣味を含むを以て、能く弊害なきふしのみを以て授くるにあらざれど、さなくも感情に富む青年女史に讀ましむべからず。

これに反して漢文は、第一適切の文字を知り、第二精神を修養し、第三文章の材料を得る効あり、されど、又必要ならざる難句を學ぶため、無用に時間を費すなど欠點もあり。稍もすれば、わが國躰風俗と相合はざる弱點もあれど、心して撰擇せざるべからず。しかのみならず、漢文のみを讀むときは、わが國の語法を亂す嫌も生せん。

かく考ふれど、女子教育上には、國文とか、漢文とかの差別を廢し、讀書科として和文、及び漢文を適當に學ばしむる必要あり。されど、今日、讀書科につきての急務は、和漢學を混合せし適當の教科書を編纂するにあり。そも〱、女子の德操を養ひ、節

養の心を作るなど、精神的教育に影響するものは、專ら讀書の教科に由るべきものなれど、單に雪月花のながめをものし、あるは立身處世に功益なきものを、單に章詞流暢なるなど、細末のことを採りて教科書に撰ふ如きあらむか、女子を教育する道にあらざるべし。實に女子教育の要は、その精神を修養するにあり。それは、漢學を學びて讀書力を養へといひしも、書を讀み文を學ぶを以て滿足せず。將に、德を愼み、行を力るを肝要と思へばこそ、實踐的道義を本とする漢文を賞勵するなれ。浮薄の才女は、好みて浮薄の文章を愛するならむか、あはれ。次には和漢の學を兼ぬる教師を求るにあり。かの新井白石、貝原益軒、及び室鳩巣翁などの如き學者は、和漢學を兼ねしものを、今や偏見の學者のみなれば、大切なる讀書力を養ふに人なきこそ恨なれや。



史談

横笛

鹽井福子

横笛と聞ゆるは、平相國清盛入道の女にて、高倉天皇の女院建禮門院に仕へたる

女房なり。もと、神崎の遊君長者の娘なりけるが、太政入道福原へ下し時に、これをめされ、それより、女院の未だ中宮に渡らせ給ひける時に、その侍きにとて、進められけるを、小松内府重盛公、何と思召けん、横笛と名を付けられけるなりとかや。此の女房、容顔いとうるはしく、今様、朗詠は云ふも更にて、琴、琵琶、歌舞、音曲、いづれも妙を得、殊に、心ばへやさしうして、情も深く、もとはいやしげなる身なれども、數ある宮人の中にも、めづらしきものに、とりはやされけり。

此處に、三條齋藤左衛門大夫茂頼といへる子に、齋藤瀧口時頼といふものありて、かねて、小松の大臣殿に仕へてありけるが、いとあはれなるものに思ひよりて、いつしか行末をかけてさへ、細にかたらふ中となりぬ。その事、はやく父なる茂頼の耳に入り、こはあるまじき我が子の心がけかな。何事も桂蘿のはひ上るべき方を恃まんずる世の中は、たのもしき人の聟ともなりて、世に立つべきねにしをこそ求むべきに、何でとぞ。はかなき殿上の宮女ばかりなる者に語らひたのみて、行末如何なるものとかならんとする。由なき思ひ、ゆめ止まりねと、いたくいましめさとしけれど、時頼は、つくづくと考ふるに、峯にたなびく白雲、水に浮ぶ水泡の頼まれぬは人生、唯、春の日のかぎろひにも似たるはかなき世の中に、何の富貴をか待つべき。しかも、女子の

ゑにしなどにすがりて、身の富貴を求めんなどは、世にも汚き志なめ。さりとて、親の心にたがはんも、心ぐるしき限りなり。とてもうき世、そむきて心一筋にすみはてんものと思ひたち、まだ廿歳に足らぬ行く先きも長きみどりの髻、をしげもなく思ひ断ちて、嵯峨の往生院に入りたるこそ、あはれなりかし。

我がために瀧口が入道せしと云ふ事をきゝて、横笛は、またいたくおどろき悲しみて、世につらからむ妾をこそ捨てもし玉へ。妾故に世を捨てさせ玉はんとは、あまりにいとはしさよ。あたら大丈夫を、やうなき身故に、世をそむかせまゐらせし口惜しさよと、思ひ込みては、中〳〵に身も心も、かくてあられず。そのまゝ内裏をまぎれ出でゝ、これも、法輪寺へぞ迷ひ出でける。

折りしも秋の夕つ方、ふる白露はいと深く、涙さへひまなくてこぼるれど、いとゞしとゞに濡れしほれつゝ、草の嵯峨野をふみ分けて、やう〳〵に法輪寺につきしかど、何處の坊と、定かにも知らざれど、今は、消えゆくばかりの心地して、なく虫の音もひときは弱るまがきの下に、暫時泣き沈みてありけるが、近く住みあらしたる僧坊に、いとしめやかに念珠する聲は、正しうありし瀧口の君と聞ゆるに、うれしさ云ふばかりなく、閉ぢ捨てたる柴の戸に立ちよりて、あるじの僧に逢はまくほしき事ありて、都よりは

る〳〵と、横笛と申す女子の尋ねまゐりたり。こゝしばしあけ玉ひてと訪ふさまを見れば、裾はつゆ、袖は涙にぬれて、くちば色のかつぎのあやもわかず、いとゞあはれなる有樣、いかばかりの道心者も、さすが心弱くぞ覺えんと思ふに、一旦思ひ斷ちし入道の心は、いと堅固にして、さやうのものにゆかりある人は、此處にはあらず、外をば尋ねられよと、つれなく答へて、出でも來ず。さ云はるゝは、正しう瀧口殿に御坐さずや。いかでか御聲を忘るべき。のう、こゝ明けたまへ、妾故の遁世と聞きまゐらせて、いとゞいとはしさに迷ひ出でゝ、此處までは參りたり。たゞ一目なり、一言なり、見もし申さまほしきに、しばしなり、此處あけたまひてよ。よよとばかりに、叩けども〳〵、更に答へなく、念佛の聲のみいよ〳〵高く、横笛が叩く音、泣く聲は、たゞ落葉の窓をうつほどにも聞こえぬげなるを、横笛は、よもすがらたゞずみあかし、曉、何をか思ひ決しけん、きつと立ち上りて、

山深み思ひ入りぬる柴の戸のまことの道に我をみちびけ

只今はいかに申すとも、よも聞き給はじとればゆ。れん身ましまさずば、妾も此の世にある心なし。今よりは、妾も佛の道に仕へまつり、諸共に佛の御邊りにめぐりあはむ時をこそ頼みまゐらすなれとて、しほ〳〵として立ち去りけるが、遂に十七と云ふ年、

にはひこもれるみどりの髪をきりすてゝ、咲かで枯れにし花の恨みを、ながく人の世にとゞめぬ。まなく阿彌陀の峯に入るさの月のあとを慕ひて、むなしくなりしといふ。或は、なほ思ひあまりて、大井川の底の水屑と身を捨てはてたりともいひ、或は、その後、入道と共に一つ庵に住みて、諸共におなじ佛に仕へたりともいふ。異説まち〳〵なれど、いづれ嵯峨野の秋のくれ、あはれにきこえし笛の音なりけり。

編者附記す。此の横笛がなしゝことは、決して賞すべきことにはあらず。寧、難ずべきあり。然れども、彼が身もと賤しく、まして、惡逆清盛が娘となるものにして、此の心情と此の誠實と此の柔和とあり。且、其の契を重じたるの義、頗る憫むべきものあり。彼に欠點あるの故を以て、此の美を悉く抹擦するに忍びん。之を當世浮薄の女流に比すれど、其の優果して幾何ぞや。然りと雖、尚、彼が行は、ゆめ學びてやは女子たち。記者が特に此に之を採る處のものは、只、横笛が胸裡滿溢の涙にして、而して其の行に非ず。世の諸孃、幸ひに、意をこゝに止め、見るに活眼を以てし給はんこと、これ編者の切に希ふ處なり。

下野國の婦

高角正人

いつの時代なりけん、名も知るによしなし。下野國に、さる男女住みけり。年ごろ夫婦のちぎりむつましくてありけるが、いかにしけん、此の男、外にみめよき女を得て、こをこよなきものに思ひ、日毎にそがもとに通ひ居けるが、のちには己のもたるはどのものは、皆此の女のもとに運びて、さて、みづからもいきて住みけり。ざるからに、妻のもとに殘りたるは、たゞ、馬と舟とのみになんありける。后には、夫をも、此の男、まかぢといひける童をやりて、此の舟をさへとりにつかはせたり。わらはに向ひて、女のいひけるは、ぬしに消息をきこえば申してんや、文はよみ給はじ、たゞ、ことばにてつたへよといひけるに、わらは、いとよく申しさふらはんといひければ、かくいひける、

　舟もいぬまかぢも見ねじけふよりはうき世の中をいかでわたらん

わらべ、此を男に告げゝるに、男きゝてあはれさに堪へず、つひに、かきはらひし物ども、皆、運び返して、もとの如くにそひけりとなん。

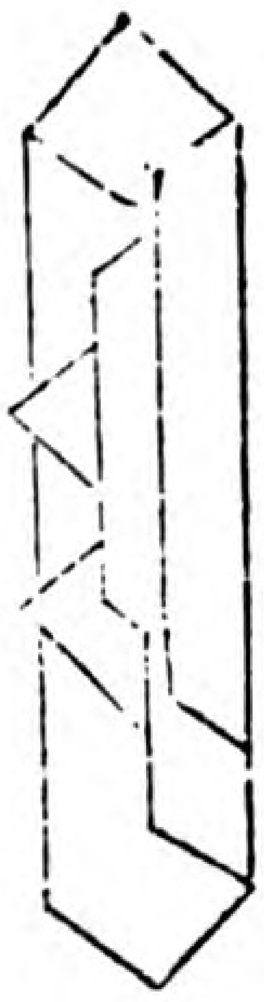


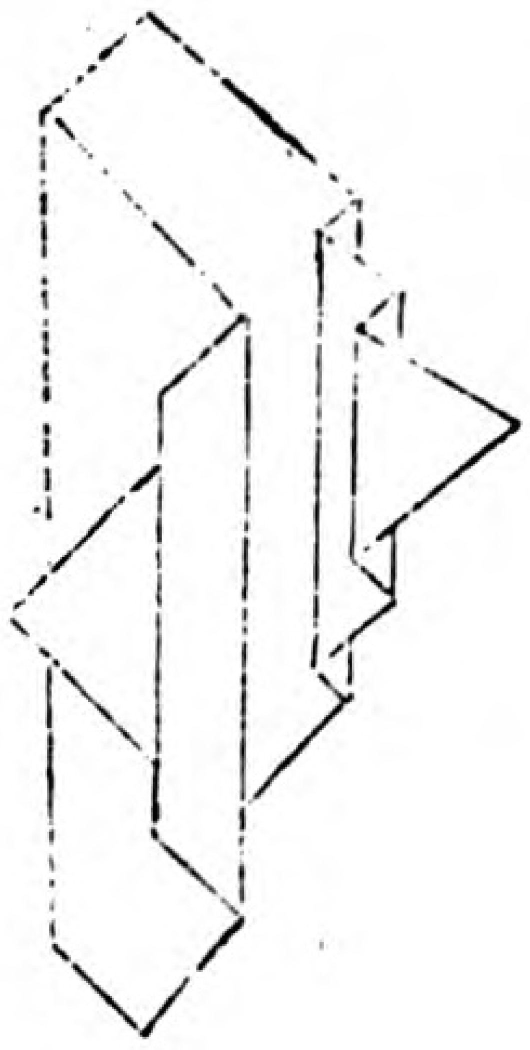


折形

有住齊

草の帯包

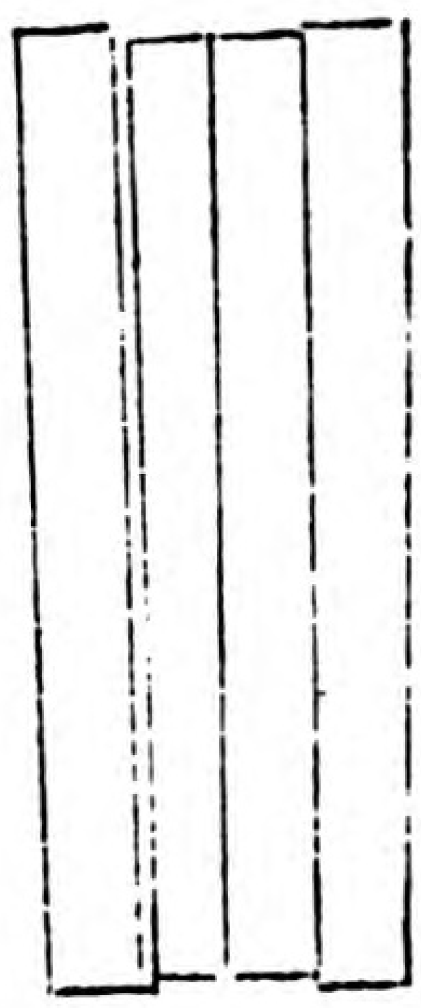


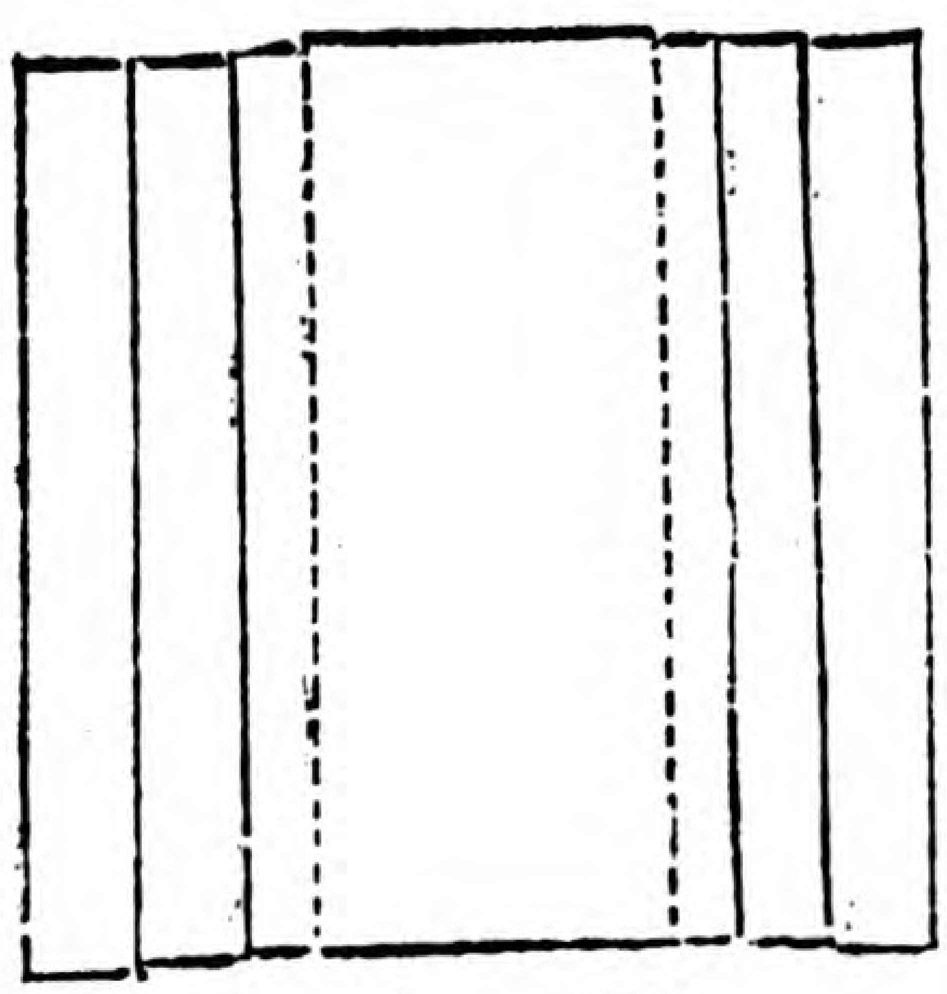


れなじく解きたる圖

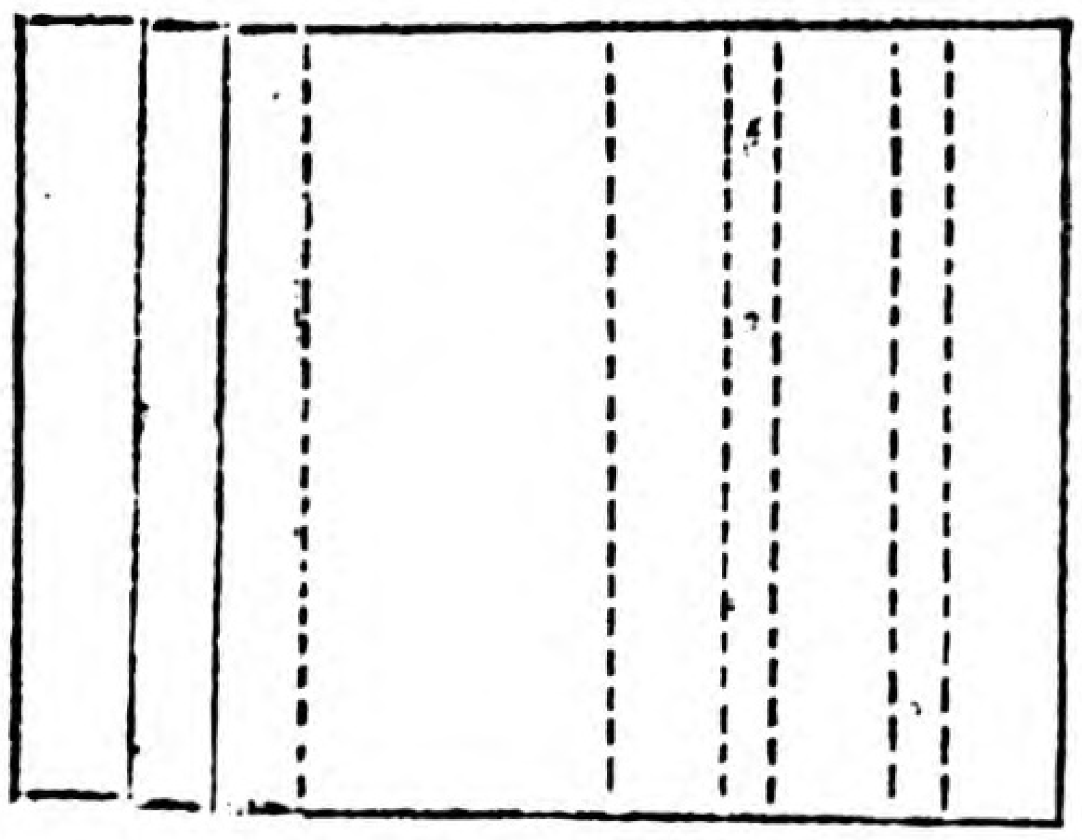
ぬはざる帯包

くけぬ帯を包むなり。





同じく右をひらきたる圖



仝じく左を開き、尚右を延ばして折り目を點線にて示す

茶の湯

薄茶平手前

孤峯庵不羨　關　葦雄

薄茶を點る稽古に掛るに臨み、愛觀の女君等に一言すへき事あり。全体、茶は、爐と、風爐と、季節により、手前に差違あり。今は風爐の時なる故に、先以風爐手前を先にせんとす。前號割稽古も亦然り、爐の手前は其の季節に至り、漸次是を掲載すへし。

偖水屋拵相濟候た、先つ宗匠に對し一禮をなし而して後、水屋に拵有之水指を左右の手にて持但水指は其恰好にしゝろさ雖も先は胴より下の方を爪先を下けて篤さいたきもつへし持運び出るには左右の手を伸し、其の間より足元を見るべし、但疊の縁、同敷合目、敷居を踏ざる樣に歩行すべし、手の高さは大約臍の通りたるべし右の足より踏出し、敷居及疊の敷合は縱横共に右の足より踏入へし、但行歩の廣狹は横疊は二た足竪疊は四足に歩行へし道具疊に入にも右の足より入る但道具疊さ云は、風爐を置、水指其の他道具を置合、茶を點る人も夫に座を定めて手前をする故に小間廣間共に此處を道具疊さ云ふ、古實也清淨を要す水指と風爐と相對する物なれど、其の程度を見斗踏留に但左右の足を踏揃へ蹲居て、風爐釜の鐶付を見合、其の通に置くべし、左右は疊の眞中也、手を膝に取には、右の手を先に、左手は手丈け跡に、則、手を膝の上に置て、足を爪立、一束に立へし、右足より引、左足を引、又右の足を引、後ろに廻り、左足より歩行出し、水屋に入、但三足引ながら自然に廻り引き入るは當流の習也尚口傳次に、棗を右の手に持、但甲の上を中月に持尚口傳左手に茶椀を持、但左の方眞中を持つ左右の手を向へ出し、相並ぶ、但棗さ茶碗の高低は棗を茶碗の程上けて可持棗さ茶碗さの間は二寸程明けて持へし右兩器を持ち出し、水指の前に据り、棗を

先に置、續て茶碗を置くべし、但置付に習有之、水指さ接近せざる樣三つ鋲輪に置くし、跡さ茶碗の間け二寸程明けて可置左右の手を膝に取て、一束に立べし足を引て入る事水指の時の如し、次に水翻を持出づる、但翻の持方は柄杓の掛りたる際を左の手指先にて持、手肘を十分に伸し、左右の脇膝節の處に至迄下けて持、平等にして柄杓の落ざる樣に注意すへし此の時は眞直に道具疊へ向て、正中に出風爐と水指との距離を見斗、但大約一尺程座すべし、但此時翻は膝頭さ等しく置なり直に左の手にて、翻に掛たる柄杓の柄の中節の際を持、左の膝頭の邊に持ち來りながら左手を加減して柄杓の合前へ向樣にすべし、右手を出し、柄の元と添へ篤と構ふべし、但此時柄杓の持方大に習有之、左手の拇指さ中指の腹さ向き合殘三本の指は中指の爪先に準へて揃樣にすへし、合のこうばいは上を平等になるやうにす、是を流儀にては鏡構さ云、合の圓形を見るに鏡を見たるの心持成故名付るへし。偖右の手を放し、左手を僅少脇の方へ寄せ、右手にて翻の中に入置たる蓋置を出し、膝の上中央に持來り、蓋置の向を改め、芽わらた夫を前にし、但此前さ云は柄杓を引て柄の通に芽の向樣に置付べし風炉の左の方隅小板の角の所、疊の縁より三つ離し、小板の方も疊の目三つ程離すへし、但見斗右手は直に柄杓の柄の元、始め持掛へたる所を持、柄杓を横にしながら前の方へ押出し但此時右の拇指上になる樣に右手を上より持、但此時は右手の掌の内に柄杓の柄の元切留穴る樣にし、拇指さ名差指にて右左へ引挾み持、殘る指は中指の横腹に柄の當る樣にして、殘二本の指は夫に準へて添置へした左手を放し、靜に蓋置の上に至らしめ、蓋置を狙ひ穩に卸し先合を掛、但此時微音有へし次に柄を我が身の左の膝頭に筋違へて柄の先を但切留の處を置へし、但是を茶言葉に柄杓を引さ云ふ其の次に居前を調ふべし、但襟元をつくろひ、座したる膝をも心に叶樣衣文を調へ、左右の膝頭を能揃へ、心に叶樣調べし、其體格の構へは割稽古に示したる時の如し、精神も能落付不剛不柔樣にすへし偖水翻を左手にて僅少前に出し、但膝頭へ半分掛るを法さす直に右手にて茶碗を持、前に持來り、左手をおひしらひ、右手を些少向へ送り、持風炉の小板の隅と我が膝との中央を見斗ひ、置付べし、續て右手にて棗を持、茶碗と膝との間に置へし、但此以下帛紗さばき等順序を教授して手品手付の詳細は割稽口に讓りて爰には不言次に左手に

て帛紗を取、左右の手にて塵打して疊み右手に持左手にて棗を持、膝の中央にて拭ふへし、直に茶碗置たる跡へ置付、帛紗を疊直し、左手に持、右手にて茶杓を取掛事割稽古の條の如し、拭終りて茶杓を棗の上に置、其の次、茶筌を右手にて出し、棗と置合（但棗と茶筌の間隙の目四つ五つの内見斗）其の次、右手にて茶碗を少し前へ寄、帛紗を一つ開き、打返し、上の隅を取り引立、二つに折て腰に付べし。

（以下次號）

正●　誤○

女鑑第百三拾八號二十一頁割稽古の續茶筌湯治の條に、如斯する事四回の後とあるは三回の誤植

女の禮

有住常子

いまより七百年の昔の物と聞きはべる、唐物語といふ書に、

昔梁鴻といふ人、孟光にあひ具して、年ごろ住けり。此孟光よにたぐひなく、みめわろくて、是を見る人、心を惑はして騒ぐほどなりけれど、此男を又なきものに思ひて、傳き敬ふ事、思ふにも過ぎたりけり。朝な夕なに飯匙とりて、筍子の器物に盛りつゝ、眉の上に捧げて、懇切に進めければ、齊眉の禮とぞ、今は言ひ傳へたる、

さもあらばあれ玉の姿も何ならず
　ふだごゝろなき妹がためには

志だにあさからずは、玉のすがた、花のかたちならずとも、誠に口惜しからじかし、されどもみにくからぬ顔には見ゑがたくこそ。

女の禮のことは、是よりは古く見ゑたれど、こゝにからやうに眼のわたり見ゆるごとかゝれたるが、彼

伊勢物語にゐなる、河内國高安の郡にありし女の、はじめこそ心にくゝもつくりけれ、今は打とけて、髮をかしらに卷あげて、おもながやかなる女の、手づから飯匙を取りて、笥子の器物に盛りけるを見て、とはじめのみ禮ありて、後に禮なきさまを見せしにむかへて、とりぐ〵めづらしうなむ思ひはべる。このごろ世間に出にし、女の禮の事かいたる書のはしはしを、たどたどしうもよみ見侍りしに、男のものされしは、こまかき節まで、いひれよぞず、詞は清國風のかしこげにつゞけたるものから、まことなる匂ひもきこえず、女のものせるは、すこしこまかき節をこめむと、思はるゝ氣なれど、西洋風をもと、さかしだちたる心には、なかく〵に細かき方にはれおむかずで、あらく〵しうなりゆきたり。詞は男のよりも理りあるやうむづかしうかいたり。

女の禮の古き樣は、玉ちはふ神の御世に、男神女神の二柱御神の左右より回りたまはしゝ時に、右より廻りましゝ事、又大穴牟遲神の、須佐之男命の御許にまゐいたりたまへる時、其の妻となりたまひし、須勢理毘賣命の、蛇、呉公、蜂の比禮を、其の夫に授けたまひて、蛇、呉公、蜂の禍をはらはせしなど、かぞへもつくしがたうなん。

ことめでたく思ひはへるは、れなし神代の書に八千矛の神の嫡后須勢理比賣命のみづから大御酒抔をさゝげて、豐御酒たてまつりてうきゆひ（盞結）の禮ありし。天若日子とたがへられし阿治志貴高日子根の命の御名をあらはしゝ、高比賣命（下照比賣一名）の敬び。又諸くの魚どもにまをして、天神の御子につかへ奉らしめし、天宇受賣命の敬び。又木之花之佐久夜毘賣の、天孫命にみこたへ申しゝ詞、又豐玉毘賣命の

つかへまし丶御様などをはしめとして、女はことに〳〵つ丶しみいやまひたりし、おほんさま、ふみのうへに、いと〳〵れはく見え侍り、御世御世の書に見え侍るがごとく、いとう上つみ代には、れのづから禮の事はさだまりて、ことさらに禮の道とて、何の禮くれの禮とのわかちは侍らざりしなり。

後々のみよには、男のゐやにまじへ用ゐられ侍りし異國の禮の手振（この異國の禮と云はこのくにの尤古き代の彼國に渡りたりし禮をいふ）の、むづかしきやうの、女にもすこしはうつり侍りぬ。

しかは侍るものから、男の方の、いよ〳〵たけきさまになりゆきて、まことの禮びをうしなふもの丶れはくなりこしに、女はなか〳〵にやさしう、まことの禮びをうしなひ侍らざりけり。

男はうつりこし世々につれて、いでき侍りし種々のやうを用ゐ侍りしによりてにやあらむ女は其のくさ〳〵の世ぶりにより侍らずて、かみつみよのま丶なる禮のやうを用ゐ侍りしによれるにやあらまし。

まことに、かうやうなることゞも侍れど、御世々々のあとのやうは、男のかたにゆづりて、女にはむねとたづね侍らぬもくるしからぬにやと思ひ侍る。

こ丶にはちかき世より、今の大御代にわたりてもちゐられしと、もちゐられたるとの禮のことを、いわけなき童に、筆とらせて、つき〴〵にものして、禮のあらましをつたへはべるになむ。

（このはしことばは筆とれる童のものしつるになむ）

室町将軍時代の人のものせる、女郎花物語のひきいでもの丶條に、

又こがね（砂金なり）を、ひく事うすやうに包むべし、うす

やうは其時節にしたがひて、春、夏、秋、冬、四季の色によりてつゝむべし、高纈紙につゝ　事もあり、時によるべきにや、必こがねの打しきはやない箱にれきてまゐるべし。云々、

又毛皮をひく事、毛をうへになして、両方のはしををりて三ッに折る、鹿の皮の時は、白毛をうへになす、熊の皮の時は、面皮をうへになしてひくなり。云々、

羽をれいてもひく事あるには、くきを尊者のかたへむけてれくなり。

あふぎをれくも、かなめを、客人のかたへむけてれく也。云々、など見ゑ侍る。

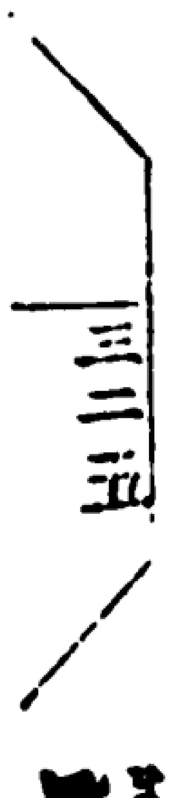
其の頃の女の訓の書の様をしる料になり侍ることにこそ侍れど、はじめにかきとゞめ侍るになむ。

たちぬひ

西山たい子

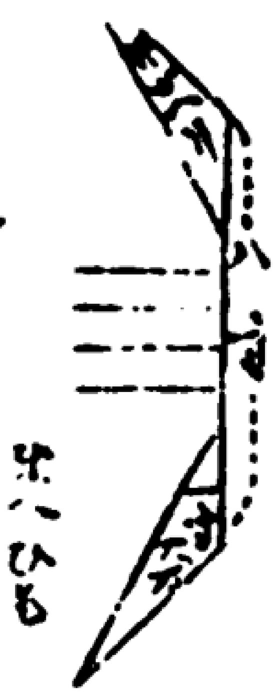
袴のぬひ方（つゞき）

さて、先日のぬひさしの袴どりのべ、先きに云ひし紐下の丈けをとりて、なりつけをもて線をつけれき其線にあはせて後の丈けをも定めて條をつけ、其條の處を袴腰と同じ巾、即ち



眞中より三寸二分五厘、合せて六寸五分の巾に、なりつけもて、しるしれき、ろこより相引まで斜に裏にかへして折り、其はしを三四分むかり中に折りこみ、後布にごく小針を出して絎けとづべし。左右ともさはすべし。さて、今度は前の紐付の條の處を、また眞中より四寸の處になりつけもてしるしつけ、其處よ

り相引まで斜に表にかへし、折りをつけ、そのかへしたる切を、上の方一寸むかりの巾にしてまた表に折りかへし、其かへしたる端を一分むかり折りめより外に出してまた折り、折りめを中に入れて、端にて絎るべし

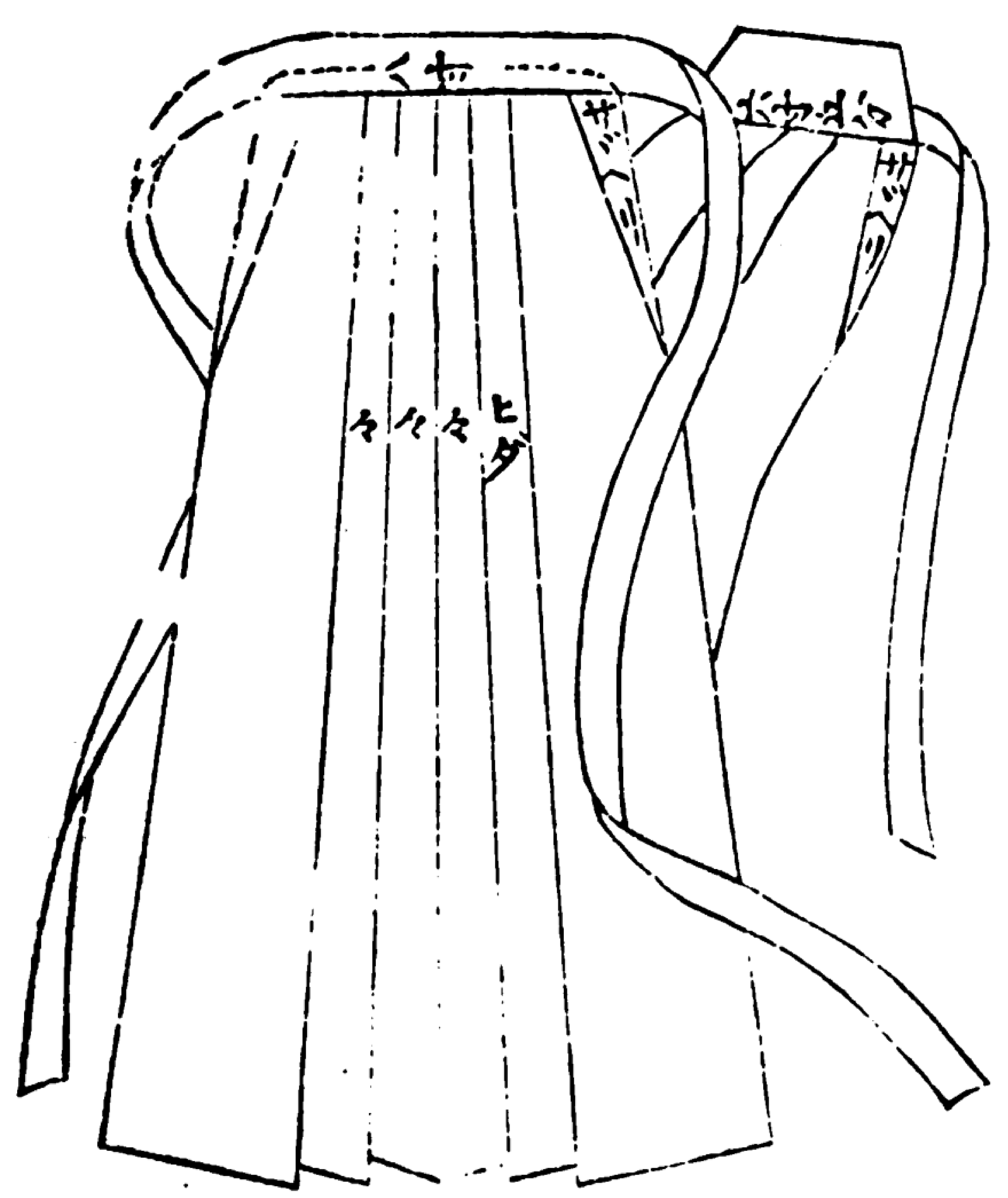


さるをさゝべりと云ふなり。さて、それより前紐をこり、あけれきたる處に、折りすぢをつけ、ひもつけの線と合せて表をぬひつけ、裏にて絎けるべし。但し其ぬひつける折り襞を四枚むかりにたゝみて、ぬひこむべし、さすれど、紐の眞中の、しはになる事れそし。

また、後は腰板のうら切をとりてまづ裏の方の紐つけの線にあはしてぬひつけれき、それより袴腰をとり、表にあて、板の眞中と、線の眞中とを引き合せ、裏切れのぬひめわたりより、こよりを入れれきし上を、板の方には針めを少し出して、裏よりとぢつけ、せみ切れの上のはしを、糸して中より左右ともとぢつけ、さて、腰板の裏切れを、表より少しくうちむに折りて、のりもて表板にはりつくるべし

袴はぬひ方はむづかしきものにわらざれど、ひだ、袴腰等の襞ねにくきものなれど、よく襞ねこむまでは、數多くぬふ事よろし。

（襠高袴ぬひ上りの圖）



後巾七寸五分

腰板六寸五分

前巾五寸
ヒダ巾上が八分
下一寸二分
紐下丈け二尺三寸ばかり
サヽベリ一寸一分ばゞ
脇ぬひ一尺五寸

造花

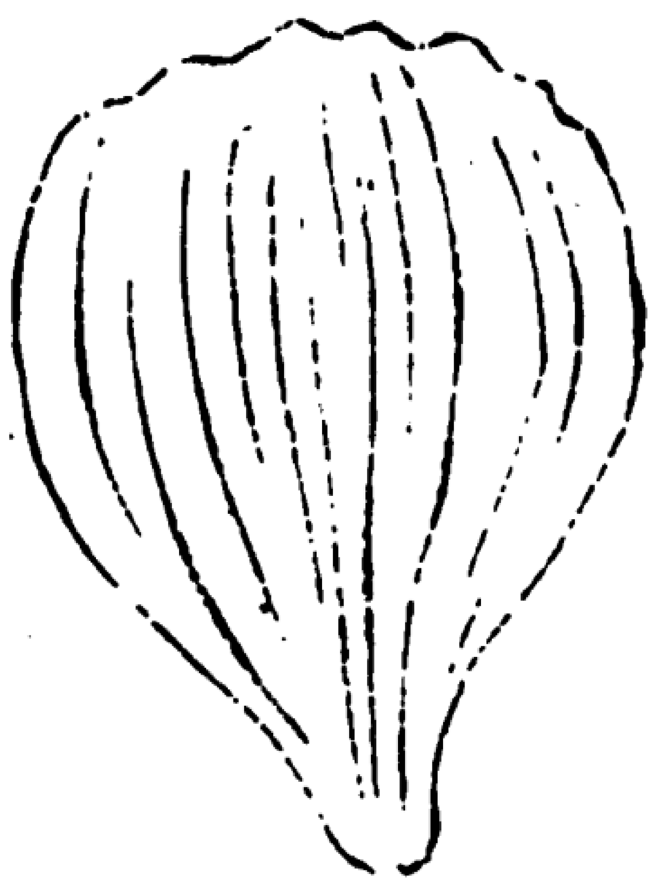
共立女子職業學校教授
伏見藤三郎

芙蓉

木のさま、葉のさま、花のさまなど、總て木槿に似て、花は木槿より大きく美はし、秋のはじめに花咲く、一重なるも八重なるもあれど、こゝには一重のものを示す。

滿開花の造り方、花瓣は、絖、又は寒冷紗、共に裏より薄糊を引き、圖の如き形に斷ち、元を薄黄色に

第九十七圖



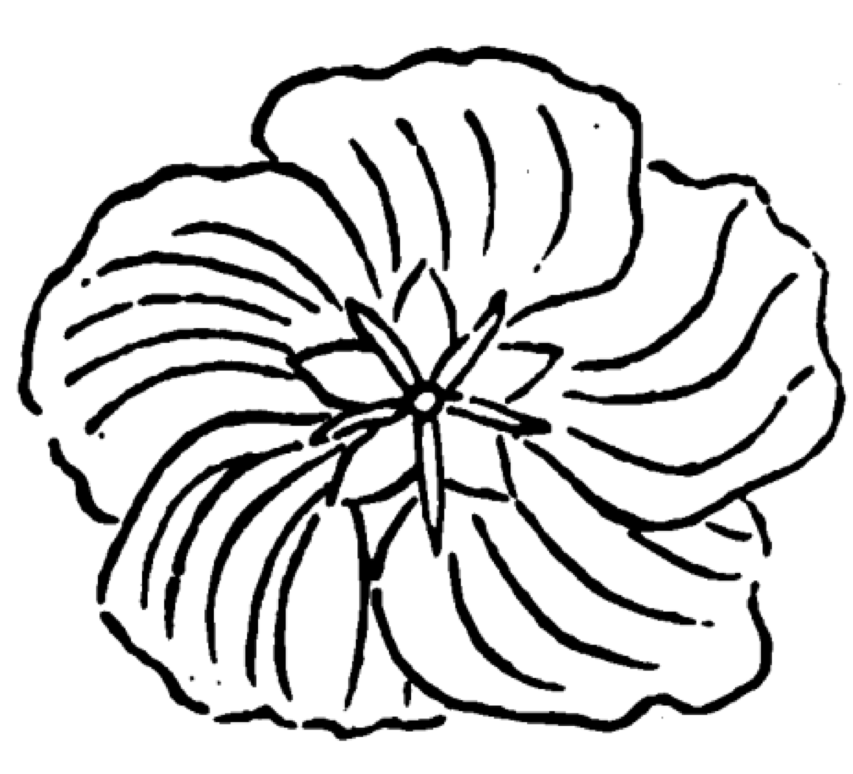
「オウラミ」にて模糊し、「フロクシン」にて眞中を薄赤く模糊し、后、筋鏝にて縱に圖に示せる如く筋をつけ、薔薇鏝にて、元の處を內部に凹まし、先の方を瓣鏝にて外部にそり反らすべし。斯の如くして仝じもの五枚を造る。蘂は、極く細かきかたん糸に薄糊を引き、乾して后、長さ八分むがりに切り置き、別に眞鍮の細かき針金に厂皮紙を卷きたるものを採り、此の上に前の切りたる糸を列べ、針金の先を折り曲げて二重となし、此の糸を挾みて全体を繩の如く捻ぢて糸をはさまし、后糸をはさみたる上の方を短かく元長くなる樣に斷ち、此の糸の先に濃き糊を着けて糠又は木屑を附着して花粉となす、第九十

第九十八圖



八瓣を見よ。萼は、寒冷紗にて、桔梗の花の形の小さものを造り、別に寒冷紗を普通の葉の色に染めたるものを細長く斷ちて、前の萼の裏切込の間々に糊にて貼り付く、さて、此の萼の内部に前に造りたる花瓣五枚をくゝり附け、后眞中に蕊をさし込むべし。第九十九圖は花の裏を示したる處なり、付きて萼の造り方、花瓣の配りなどを考へ見るべし。

第九十九圖



半開花の造り方は、總て滿開と仝じ仕方にして稍小く、花瓣は鏝を深くあてゝ内部に少しくつぼみみたる樣に造るべし。

蕾の造り方は、薔薇の蕾と仝し事にして紙に綿を包みて元をくゝり、先を尖らして、その形につくり之に花瓣を細く造りて三枚はかり着け、元に萼を着けて小く纏めるべし。

葉の造り方、葉は、寒冷紗を普通の葉の色に、「オウラミ」七分「グリン」一分五厘「マセンダ」五厘を合せ溶きたる色に染め、其の上を「レモンエルロー」(黄)と「セルリン」(青)とを等分に熱湯にて溶きて染

第百圖



め、后圖の如く斷ちて、裏より針金に靑紙を巻きたるものを筋の通りに着け、莖を施して、適宜の配置に枝に着くべし。第百圖參照

だいどころ

七面鳥の燒方

七面鳥は、其形、醜じきに似ず、其肉は美味なるものなれは、上等洋食の一品なるが、之れを燒くには、先づ羽毛を去り、殘り毛を燒、臟腑を拔取、胸の骨を壓下げ、此處へ、六十目の麵包粉、大匙二枚の刻みたる、洋芹、十四匁の牛酪、二個の鷄卵、能程の食鹽、胡椒、少量の肉豆蔲とを交合せて塡込み、其口、他の孔をも、殘らず縫合せ、武火にかけるも容易に焦げざるやう、牛酪をぬりたる西洋紙にて胸を覆ひ、凡二時間程燒べし、但此間、二三回全身に牛酪を塗り、其燒け熟する五分間前に、胸の紙を剝し、其部をも褐色に焦がすべし。之れを皿に盛り、肉汁、醬汁等をかけて出すべし。

鵞鳥の燒方

羽毛を去り、殘り毛を燒き、其頭を切り、臟腑を秡き、兩翅兩脚共、關節より切り取り、煮たる馬鈴薯、刻みたる玉葱、大匙一抔の刻みたる洋芹と、能程の胡椒、食鹽とを混合せ、ゑりの方より胸に塡入れ、其口と、他の孔を縫合せ、牛酪を引きたる洋紙を胸にはりつけ、火にかけて凡二時間半、武火にて燒くべし、但鵞鳥は、脂肪分多き鳥なれど、之れを燒く時、火にかけて、後一回牛酪を塗るのみにて宜し、又胸の紙は、其牛酪を塗る時、剝し去るも可なり。鵞鳥は七面鳥の如く、紙を長く貼置に及はす、

然れ共、鵞は、他の鳥よも能く焼けたるを好む者多けれど、成べく十分に焼くをよしとす、其焼上りたる時は、一人前づゝ、能程にきり、皿に盛りて、林檎ソース杯かけて出すを佳しとす。

家鴨の焼方

先づ、前の如く拵へ、頭を切、足を熱湯に浸し、其皮の黄なるものを剥去り、之れを背上にくゝりつけ前の詰物と同じ品を填めて焼き皿に盛りたる後、同じソースをかけて用ふべし。但之れを焼時間は、凡一時間とす。

（味噌の製法）

みそを製するの原料及方法は種々にして一定せざれども、多くは大豆を煮て、其の未だ全く冷めざる内に米又は麦の麹を混じ、且食塩と水を加へて醗酵せしむ、食塩の多少により醗酵に遅速あれば早きは數日晩きは數ヶ月にして用ゆべし



秀歌集（六）

鹽井ふく子

角兄麻呂歌四首の中

風をいたみ奥津しら浪高からし
海士のつりぶね濱にかへりぬ

○風をいたみ、いたみは「いたさに」にて、はげしき故にとの意なり、風をのをには意味あるにあらず、たゞ「風いたみ」にてもよろしきなり、いたみは形容詞にて、いたは語根なり、語根の上につくべきときは、たゞ「風」とのみ云ひても、「風を」と云ひても同じ意にて、「風の甚げしさに」との意に

なるなり○奥津しら浪「沖のしらなみ」にて、か丶る處のつは、のど同じ意になるなり、しら浪は、たゞ、浪の事にて、波は白く光りて見ゆれど、しら浪と云ひしのみなり○高からし、らしは俗に云ふ「らしい」にて「高くあるらしい」「高くありさうだ」などの意なり。らし、らん、共に想像をあらはす、されど、小差あり。らしの方は、證據の物のあるときに用ゆ、らむの方は之なき時に用ゆ。こ丶には、船のかへると云ふ證據ある故に、らしを用ゐたるなり。海士のつり船、海士は漁人なり、つり船は、釣をする船と云ふ事なれど、あながちにつりする船をのみ云ひしにはあらず、漁人の船をそうじて云ひしなり○濱にかへりぬ、濱は海邊の砂原のひろ〳〵としたる所なれど、たゞ海岸と云ふ事なり、かへりぬは「かへつてきた」と云ふ意なり。

○一首の意は、風のはげしさに沖の浪が高くたつてきたらしい、海士たちの船が皆岸にかへてきたとの意にて、海士の海岸にこぎかへれるを見て、浪が高くたつてきたらしいと想像したる、詞かざらす、心おもしろき歌なり。

碁檀越往ニ伊勢國一時留妻作歌一首

神風の伊勢のはま荻をりふせて
　たびねやすらんあらきはまべに

○神風の、伊勢の枕詞なり、伊勢には大御神のましませばなり○伊勢のはまをぎ、難波のあしは伊勢のはまをぎなど云ひて、同じもののやうに思へど、之は蘆にはあらずして、濱邊に生ひたる荻なり○折りふせて、「折りしきて」との意○旅ねやすらんあらき濱邊に、浪風のあらい岸に旅ねする

であらうとの意なり。
○一首の意は、我が夫は、神風のふく伊勢國に行かれたが、嘸かし伊勢の海の濱邊の荻をうちしきて、浪風の暴らき岸邊にねて居らるゝ事で有らうぞとの意にて、家に居る妻が夫の旅宿を思ひ察したるあはれの歌なり。この時代は宿屋なぞなく、通例野宿したるもの故、草枕を旅の枕詞とするやうになれり。この歌、當時のくるしき旅のさまを思ひやるべし。

大伴坂上の郎女　和歌四首の中

千鳥なく佐保の河瀨のさゞれなみ
やむときもなしわがこふらくは

○千鳥なく佐保の河瀨の、佐保川は大和にあり、河瀨は河の瀨にて「瀨は河の淺き處を云ふなり、千鳥は多く瀨にたつものなり○さゞれなみ「小さき浪」にて、つねにたえずゆらめく浪を云ふなり、されど、いつもやむときなくゆらめく故に、やむときもなく、または、まなくなどにかくる枕詞ともなれり○我が戀らくは、戀らくは、戀るをのべしたる言にて、るの下に心を入れて「戀ふる心は」と云ふ意に見るべし。
○一首の意は千鳥がなく佐保川のさゞ浪のやむときもなきやうに、我も君を戀ふる心はやむときもない、いつも〳〵、戀ふてをるとの意にて、何となく優なる歌なり。

太宰大監大伴宿禰百代戀歌四首の中

戀しなん　後は何せんいける日の
ためこそ妹を見まくほりすれ

○大伴宿禰、大宰府にありて、殘しおきし大伴坂上郎女を戀し歌なり。

○戀しなん後は何せん、こがれ死んだ後はどうならうものぞ、「死んだ後はどうもなりはしないとの意なり○見まくほりすれ、見まくは「見たく」なり、ほりすれは、欲すれなり
○一首の意は、こがれ死んでしまつた後はどうしやうともう仕方がない、今生のためにこそ妹を見たく欲するのであるとの意にて、二世三世の事など人の如く云はず、今世にどうか逢ひたいと云ひし歌にて、いと切なる歌なり。



漫録

東塢鶴聲

朧　昔　生

歌は思を述ぶ、歌は見るもの、聞ものをいふにはあらず、見るもの聞くものによりて、思を述ぶる者也されど調べみて、整はざるは云べからず。是をいへぬ事なしと思へるは違へり。さるは成らざるにして置べきなり。譬へは、陶造の茶碗などを、拵らへんとするに、恰好よく出來ざるが如し、よからぬ物を、しひて人中へ出さんには、遲かるべし。詠まで叶はぬものにも非ず、況や誰か云付たるにもなきものをや。

昔生云、歌はありのまゝがよし。勉めて有がまゝをいふべしなどいふ人あれど、こは有がまゝと、思ふまゝの界を未た知らざる人の教なるべし。歌はさる折つけなるものならんやは。

芝居の日月、新古今の歌、又定家卿の歌の感は、芝居の感なり。此芝居の感も、人を泣かしむるものなれども、實事實景の感とは、いたく異なり。芝居

中の日月を見ずして、四條大路の日月を見るべし
皆生云、京都の劇場に四條橋の東に在り故に
四條大路云々といへり。

十六夜、イザヨヒは、凡滿たる月の出んとし、入んとするは、山端に休らひ、いざよふ心ちのせらるゝより、さる方に云へるが常にて、又其のかみは、いさよふもやすらふも、同じ意に用ひなせり●古今に、君やこん我や行んのいさよひに。とあるを、六帖には、やすらひにとせり、又後拾遺の、やすらはでねなまし物を小夜更て傾くまでの月を見しかな。此やすらはでの初句は、傾く月の縁なり、

綠子、ミドリ子は、萬葉十六に、みどり子のわく子ともあり。こは古へ小兒のさまを考ふるに、年の八とせを切髮など云ひて、八歲ばかりの時、長く延垂たるを、うなじに揃へて、切と見えたり。これをうなゐなりと云ふなるべし。さて、其の八歲ばかりにて、髮切といふを思ふに、產れてより直に髮を延すにはあるまじけれど、二歲三歲ばかり迄は頭を剃てやありけん、其の程をみどり子と云ふべし、頭の綠色なればなり。又今の世、三歲の時、髮置といふ事あるも三歲の時初て髮を置初めし古へのなごりなるべし。はひもとほりといへるも、二歲三歲までかゝる名ならでは、叶ひ難し、又唐土にて、赤子といふ文字を用ふるも、色より出たる詞にて、同意なり。

燕子花、カキツバタは、搔付花也萬葉七、すみの江の淺澤小野のかきつばた衣に摺つけきん日はしらずも。同、眞鳥すむうなでの森の菅の根を衣にかき付着せん子もがも。又、かきつばた衣にすりつけますらをがきそひ狩する月は來にけり。

摺も搔も同し事也。鵁鶄花なりと在滿か云へるはあたらず。

雅凡俗調歌、雅調、わたらよの月と花とを同じくむ心しられん人に見せむや。凡調、大井川月と花との朧夜にひとりかすまぬ波の音かな。俗調、世中にたがいひそめて飛鳥川ふちも知行もせとかはるらん。右吟じくらべて、其のけぢめを知るべし。師或人の寄花追悼の歌に、さそへはぞ散ると思ひし山風に先立花のあはれ世の中、と詠じたまひしが。是凡調なりとて、詠かへ給へる。山風に先だ花の世の中をさそふにちると思ひけるかな。

調にまかせたる歌、シラベニまかせたる歌を、詞の足らぬやうに思ふは非なり。こは足らぬにあらず、聞人の得きかざるなり。そはシラベに疎きが故也シラベにうときは、誠の足らざるなり。誠の足らざるは、歌のさまを知らざるなり。歌のさまを知らざるは、歌といふ名に泥み、讀むといふ詞に惑ひて、教ならぬ教を學びて、たゞ己が思ひを述ふといふにすぎさる事を、忘れたるなり。學者よく思ふべし。

ヨニ、よにと云詞は、其のもと得の轉語にて、其の足らへる意より、十分入はまりたる方に用ゆ。或はよに逢坂の、又よに恨めしく、よにたのもしく、など云へり。此外よもしかく、よにもしかしかといへる同し言ながら、助字の緩急によりて、其の意はへもかはらざること能はす。されどもとの思ひ入し一筋のみは、違ふべからぬは、よの一言に其意われむなり。世の字の意也などいふは、云に足らず。かの、よに逢坂なとは、俗に、決してゆるすまじ。いかなゆるすまじなといふにて、透間

なくはりつめし語勢也。

二十一代集七夕歌寄

落合　爲　誠　寄贈
故人　藤　伊季輯

古今集　　讀人志らず

秋風の吹きにし日より久堅の
　天の川原にたゝぬ日もなし

久堅の天の川原のわたしもり
　君渡りなはかちかくしてよ

天の川紅葉をはしに渡せはや
　七夕つめの秋をしもまつ

こひしくて逢夜は今宵天の川
　霧立渡りわけすもわらなん

紀　友　則

天の河淺瀬志ら浪たどりつゝ
　わたり果ねは明そしにける

藤原　興風

ちぎりけん心ぞつらき七夕の
　年にひとたひあふは逢かは

凡河内躬恒

年毎にあふとはすれど七夕の
　ぬる夜の數ぞすくなかり鳬

七夕にかしつる糸の打はへて
　としの緒長く戀やわたらん

後選集　　源　中　正

雨ふりて水まさりけり天の川
　今宵はよそに戀んとやみし

讀人志らす

水まさり淺き瀬志らず成ぬとも

天のとわたる船はなしやは

彦星の稀にあふ夜の床夏は
　うち拂へども露けかりけり

類なき物とは我ぞなりぬべき
　七夕つめはひとめやはもる

天の川流れて戀はうくものそ
　あはれと思ふ瀬に早く見ん

玉葛絶えぬものからあらたまの
　年の渡りはたゞひと夜のみ

あきの夜の心もしるく七夕の
　逢る今宵は明すもあらなん

契りけん言の葉今は反してん
　年のわたりによりぬる物を

天の川遠き渡りにあらねども
　君が舟出はとしにこそまて

天の川岩こすなみの立ゐつゝ
　秋の七日のけふをしもまつ

天の川ながれてこふる七夕の
　なみたなるらし秋のしら露

あまの川瀬々の白浪高けれど
　たゞ渡りきぬ待にくるしみ

秋くれど川霧渡るあまのかは
　川上みつゝ戀る日のおほき

天の川戀しき瀬にぞ渡りぬる
　たきつなみたに袖は濡つゝ

友則

けふよりは天の川原はあせなゝん
　底ゐともなくたゞ渡りなん

拾遺集

躬恒

彦星のつま待宵のあきかせに

われさへあやな人そ戀しき　紀貫之

秋風に夜の更け行くは天の川
　河瀬になみの立ゐこそまて

七夕にぬきてかしつる唐衣
　いとゞ涙にそてやぬるらむ

一年に一夜とおもへは七夕の
　あひみん秋のかきりなき哉　柿本人麻呂

天の川今年の渡りのうつろへは
　淺瀬ふむまに夜そ更にける

年にありて一夜いもに逢彦星も
　我に増りておもふらんやそ

渡し守はや舟よせよ一とせに
　二度きますきみならなくに

小夜更て天の川をそ出てみる
　おもふさまなる雲や渡ると　讀人志らず

逢みてもあはても歎く七夕は
　いつか心のゝとけかるへき

我いのる事はひとつそ天の川
　空に志りても違へさらなん

世をうみて我かす糸は七夕の
　なみたの玉の緒とや成らん　湯原王

彦星の思ひますらん事よりも
　みる我くるし夜の更け行は　恵慶法師

いたつらに過る月日を七夕の
　逢夜の数とおもはましかは

いとゝしくいもねさるらんと思ふ哉　元輔
けふのこよひにあへる七夕　源順

七夕は空に忘るらんさゝかにの
いとかくはかりまつる心を　中務

天の川かはせすゝしき七夕に
扇のかせをなほやかさまし　元輔

天の川あふきの風に霧はれて
空すみ渡るかさゝきのはし　源順

琴の音はなそやかひなき七夕の
あかぬ別をひきしとめねは

水の文たり立てきんぬきちらし　平定文
たなはたつめに衣かす夜は

（未完）

楠正成公夫人

井出知義投稿

南朝の大忠臣として古今の尊崇する楠正成公の夫人につきては、世説紛々として多きが中に、何れを正鵠とも見定め難き事なるが、就中、先に細川潤次郎氏の説として、萬里小路藤房公の令妹なるよしいはれたるが、いとゞめでたき説なりと思ふうち、皇道といふ雑誌に、龜井鷲笠氏の記する處によりて、全說を一層確かむる處あり。今、予も亦、聊かその証迹を發見したる處あるを以て、龜井氏の考と共に、

貴誌に投じて江湖の是正をまつ。

龜井氏云々。

河内國南河内郡喜志村美具久留御靈神社の神職青谷龜壽郎氏は、其先楠氏の武裔に出でたるが、龜壽郎氏より數代以前、大和守正直氏が、吉田兼連卿が媒介にて、萬里小路淳房の女燕子の方を娶りたりしは、全く往昔通婚の事ありしより起りしものにて、入輿の日を定むるも、正成公夫人の入輿も、十二月なりし故、元祿十二年己卯年の十二月に定めたり、已來今家に於て家娶は十二月に決して其の慣例現存せり。

と、尙、之が徵證として擧げられたるは、

楠殿秘鑑に

御臺所滋子御方者自二田家一出ツ實ニ元享三亥年十二月

慈悲庵遺稿に

極月御臺所御入り御名滋子媛上田殿御息女と申候得共實は大納言樣御實女云々

河内錦に

靈光寺樣御臺所は上田隼人正の息女と披露すれども實は和田家御出生にて元享亥年十二月朔御入輿あり

赤阪昔話に

兵衞樣御行末覺束なく風說とり／＼に付廿一日丸様は觀心寺へ御出馬御臺樣は御里方より云々

能書百傑に

楠氏能書を以て著るもの三度曰く正成夫人上田氏正秀夫人藤原氏(楠繼房を指す)此女を合して三とす

甲田系圖に

正行母楠田兵庫頭娘

とある等を擧げらる、殆んど其の考徵に遺憾なしといふべし。然るに、猶、予は右青谷氏を訪ひて、全家の過去帳を一見するを得たり、帳に、

南妃菴紫藤淵圓玉山大禪定尼　正平十九年七月十七日　正成殿室久子方上田氏

とあり、次いで全國檜尾山觀心寺に行きて、仝寺所藏の楠家過去帳を閲するに、又左の如し、

南庇菴玉山淵圓大禪定尼　正平十九年七月十七日　楠正成室於久の方南江氏

是に於て予は年來の疑團の氷解するものあり。何となれば、予曾て橘裔と稱する八田某の系圖取調を托されし事ありて其の家の靈牌を見たるに、數百年の古證と見る可きは、

大光寺雲山昇龍大禪定門　正平四年正月四日

南妃菴玉山紫藤大禪定尼　正平十九年七月十七日

此の二ある而已なりしを、南妃菴とは正行の妻女なるにやと、其の考定に苦しみしが、今に於て初めて、襁褓の内に忠孝の大偉人を養成せし賢夫人の威牌なる可きを知想するに至れり。猶、他に、

橘香餘芳に

正行母藤原氏

河内士臣傳に

正行母者一族上田兵庫頭女

等ありしを認む、彼を思ひ此を合すれば、細川氏の先説は、一歩一進事實に近づき來るの感あり、江湖の博識以て奈何となす。

河内國河内郡菊水學舍ニ在ル　井出知義識

浮世いかた舟（つゞき）

作者不詳

●後悔の事

今はむかし、もろこしの司馬温公といふ人、六悔といふ銘をかゝれたり。其のおもむきをいふに。一には、家老、出頭、奉行人などの利欲におちいり、私

をかまへ、ひがみをおこし、よこしまを行ひ、百姓をかなしましめ、諸人のうれひをうけたるつもりにつひに天ばつをかうぶり、あらぬ災難來りて、身の上滅却する時にいたりて悔むべし。二には、富貴なる時大に奢り、恣にたからをつかひくづし、費れはきれもわきまへず、此の故に、天命に背き、地理にすてられ、すりきりになりたる時悔むべし。三には、おのれ富貴にほこり、大名がたにとりいり、所司代、奉行、頭人に目をかけられ、威勢のつよきをたのみて、諸の法度をかろしめ、みだりがはしく公儀をあなどり、遂に罪科におこなはるゝ時悔ゆべし四には、若く盛なるとき學問をつとめず、ならふべき事をおこたりて習はず、晴がましき座にして恥をかき、老いてのち悔ゆべし。五には、大酒を飲みて心みだれ、あられぬ口をたゝき、醉狂してさめて後悔ゆべし。六には、すこし病ましき時に、はやく養生をいたさず、大病となりて悔ゆべしとなり。されど、此の銘をもとゝして、井上小左衛門尉何がし悔草をつくりて、いにしへ今よろづの事どもを書きつらねたるぞあはれなる。網にかゝりし鳥はたかく飛ばざることを悔み。釣にかゝる魚は餌をしのびたることを悔むといへる、萬事世間のありさま、後にくやしき事おほし。さるほどに、浮世坊、過ぎにしかたのくやしくも思へど、かへらぬ昔になりぬればしたへども、なげゝども、さらに其のかひなし。藤原の清輔朝臣の歌に、

　　ながらへばまた此の比やしのばれん
　　　うしとみし世ぞ今はこひしき

といふことを思ひ出るに、其のかみ、てならひをせよといはれし物うき、ばくち、遊興にたゝきあげた

る悔しさ、今はなか〳〵。其の時はまらでありける物をと、とびたつ如くに思はれつゝかくぞよみける

なか〳〵に過にしかたのくやしきは
あだに暮れにし月日なりけり

●餅に噎て錢をやらざる事

今はむかし、浮世坊すでにうゑにのぞみけれど、店やにいたりて餅を喰ひけり。饑さはひだるし、廿あまりも喰ひて、彼の天王寺にて信田のもの〻與へし錢を、腰に付けたるをさがしけれども、いつの間にかれとしけん、何もなし。いかゞせんと案じけるが、きつと思ひつきたる事ありと、俄にもちをのどにつまらし、目を見つめ、手を握り、たゞきつ〳〵といふ、店やの家主をはじめ、其のほか召しつかふものまでも立ちかゝりて、せなかをしたゝかに打ちけれど、つまりたる餅は外へやとび出でぬらん腹へやすべり入りけんしらず。浮世功大ごゑをあげ、あらかなしや人ごろしよ、大勢よりてばふずを打ち殺すぞ出あへ〳〵といふに、あたりは膽をつぶして出合せて仔細をきく。家主は、あの御坊のもちにむせられしがいとをしさに、家内たかりかゝりてせなかをうちたりといふ。うき世坊は、いや〳〵それがし餅にむせたることなし、たゞ大勢より合てかやうにうちころさんとせられたり、とかく公儀へとゞけてなどいふほどに、どよみになり、あつかひになりて、錢とるべき段もなし、やう〳〵にして徃なせたり。

拾玉抄（一）

緒言

安藤正次

言の葉の玉ひろはゞや秋の夜の月に明石の浦つたひしてと蓮月尼がうたへる、それと是とは、小しく

趣ことなれど、言の葉の玉をろひはむ心の程はおなしかるへし。

清原のおもとの筆つき、紫の名に負へる人の心かまへは、多く世にもてはやされて、知らぬ人はなかるべし。されど、それは措きて、その他の文のまき〳〵の中にて妙なりとおもはるゝところ〳〵なとあるが、また、世に示しもらされたるものなとあれど、つき〳〵にとりいてゝ、評釋めきたるものをもそへてひめたちに示しまゐらせむとす。みるめかる、あやしき蜑のたはわさ、なか〳〵に瓦をも、玉とひろひ、玉をも、瓦とあやまるたぐひもおほかるべし。また、みるにしたがひてものすることなれど、ついでもたゝさるべし。そは、よきに見なほしたまへや。

○有明の月（和泉式部日記）

九月十よ日はかりの有明の月に御目さましていみしく久しくもなりにけるかな。あはれこの月はみるらむかしとおはせど例の童はかりを御供にておはしまして門をたゝかせ給ふに目をさましてよろつをおもひつゞけふしたるほどなりけり。すべてこの頃は折からにや物心ぼそう哀に常よりも覺えてぞ詠めける。あやし誰ならむとおもひて前なる人をひきおこして問はせむとすれども頓にもおきず。辛うして[illegible]して又人おこせども起きず。辛うしておきてもこゝかしこものにあたりさわぐ程に叩きやみて歸りぬるにやあらむ。いぎたなしとおはしぬらむこそ。物思はぬさまなれど同じ心にまだ寢さりける人かな。誰ならむとおもふ。辛らして起きても人もなかりけるにそら耳きゝおはさうして夜の程たに何とかまとはさるゝさわかしの殿のおもとたちやと腹たちてま

た疑ぬ。女はやがておきていみじうきりたる空を詠めつゝ、あかくなりぬれどこの曉おきのほどの心におぼゆる事どもをはかなきものにかきつくる程にぞ宮より例の御文ある（下略）

和泉式部は誰も知れる如く、藤原氏全盛時代の一名媛なり。その文章和歌は、實に、その妙を得たり。蓋、紫清二女につぐ所の才女なり。然れどもその素行は、毫も修らずして、常操なきが故に、常に、人に彈指をうく。惜哉。才女の稱をうくる事はうべけれども、賢女の名を蒙る事あたはず。此の章は、式部の日記中、その最妙所ともいふべき所にして、敦道親王（冷泉院第四皇子三品大宰帥）の、式部のもとに通ひ給へる事を叙せる條なり。文情雙絶、叙事精密ともいひつべし。御目さまして云々といへるは、宮の御事なり。秋の夜、ふと寢覺せるに、有明の月、皎々としてすみわたれり。その月の光に、式部の方をおもひやられて、「この月はみるらむかし」とおぼされ之を訪はむとたちいでられたる。何等の優情ぞ。「此の月は云々」と力ある一句をもちて、宮の心中をえがきそへたる。作者の手腕實にさえたりとやいふべき。

然して、式部の方は、又いかにといふに、是も、常よりも、あはれに覺えて、目をさまして、よろづをおもひつゞけふしたるほどなりけり。こゝに至りては又、一層の文情をそふ。

次に、門を叩く人のあるにおどろきて、人をおこす條最妙なり。前なる人とあるは、おのれの傍にいねたる人なり。次に、又人おこせどもとあるはおのれの傍にいねたる人が、辛うじておきて、又

下男などをおこすなり。その、深夜、人をおこすさま、宛も目前に見るが如し。而して、一も、主格をあらはさずして、判然と、その動作を區別せしむるは、是、わが、國文の妙なる所なり。

その人をおこすに暇どりたるため、訪ひ來れる人は、歸り去りて、やうやくにおきいでたる人は、また、訪へる者の隻影だにもみず。卽、さわがしのれもとたちやと怒りて、またいねたり。然も、未、その人の、誰なりしかをしらず。翌朝に至り宮よりの御文あるによりて、始めて、宮なりしを知る。此の間、素より、事のおかしきが爲に、作者の筆も、大に助けられたるが如き觀もあれど、複雜なる深夜の景を、輕々一抹し去りて、然も、その妙味を、人に感ぜしむるに至りては、大に、その作者の筆を賞せざる可らず。

終にのぞみて少しく批難を加ふべき點あり。そは他ならず。實に文法上の過誤なり。此の時代にありては、往々文法の誤などもいできて、彼の源氏物語にすら、幾度の誤をもみいだす程なれど、さして、深く咎むるには足らねども之を、文章の摸範とせむとするに當りては、正格なる文法にあてゝ引直さゝる可からず。

此の一條に於きて、誤とみとむべきは、實に主客混亂せるにあり。先、九月云々とかきいだして、門をたゝかせ給ふにといへるまでは、宮を主格としてのかきざまなり。然るに、次の、目をさましてといへるは、式部を主とせるかきざまなり、かく、一連續の文中、主格をことにして用ゐるは、その意義混亂する虞あり。こゝは、必、門をたゝかせ給ふと、一旦、結びて、次の句をかきいだすべき

所なり。
次に、辛うしてねぞろかしてといへるも亦次の句とつゞかず。こゝは、辛うして驚きてといはねは主客明ならず。



雷（續）

金津常十郎

避雷針　此は落雷の災を免れん爲に設くるものにて、其の構造は、屋上の最も高き所に鐵桿を立てゝ、其の先端を尖らし、之を白金鍍金し、これより銅線を引きて地上に達せしめ、其の端は井戸、池などを掘りて、其の水中に導くを善しとす、斯くすれば、空中の電氣は、此の銅線を傳はりて、地中の電氣と和合するを以て落雷を免かるゝなり。
昔より俗傳に、家の傍に桃樹又は柊樹等を植うるも此と同じ理にて、此の木に依りて電氣を導くなり。又線香をたき、蚊帳をつるも理あることにて、あながちに未開の樣に言ひくだすはをこがまし。

雷粉　燐類にて製りたるもの、白色又灰色なり、觸るときは火を發す、彈藥に配合するものなり。

雷管　∩又は管の形にして、底に雷粉を塗り、洋銃の火口に用ゐるものにて、單に管とをいへり。

地雷火　彈藥を包みて地中に埋め、電氣にて爆裂せしむるものにて、敵軍鏖殺の用になすもの也。

水雷火　彈藥を器中に封じ、水中に投げいれ、電氣をおこして爆裂するものにて、敵艦抔破壞するに用ゐるものなり。

これらは爆烈の音のいかめしきより雷の名をおはせしならん。

雷の床　我が高祖父宮井安泰のものせる隨といふ書に云はく、信州蓼科山は高山にて三郡をまたがり、山の大きさも、凡そ三十里といふ、水の響物すごし、木立するどくして谷峯をめぐるに、雷の床といふ處ありし、岩をかさねて木々生ひからみ、上より幅一丈ばかりなる瀧おつる、外へまはれど、壁のごとく、岩數十丈あり、姫子松延て砌をつゝみ、日にうつれど着たる衣裳はみどりに影うつりてうつくし、絶頂には土なし、磐石は瓦を敷たるごとく、松は筵をならべたるにひとし。

雷獸　同書同條に、此の高山に小鳥の聲其の松のうちにあり、上より能く見れど、鳥にてはなし、栗鼠のごとく、尾ふとくして、毛も栗鼠の色なりし、白毛交て斑なり、此の獸名なしといふ、其のなく聲小鳥のごとし、其の聲さゝて、姿うつくし、勢つよくして手にとるべからず云云

又、異獸あり、夏雷雨の發る時小獸岩はにあらはれ、雲を望み飛て雲に入、其の勢ひ糸を引ごとく、火を顯す數十、須臾の間に、雲に飛入やいなや、夕立して雷鳴するなり。（あやしき說なれども本のまゝ）たまたま、處地の人、死たるを得て、みるに、大さ小犬のごとく、灰色、毛松葉の針の如く手をさす、頭長く、鳥の如き嘴あり、其の嘴半は黑し、尾は狐の如く、ふつさりとしたり、爪は鷲よりもするどく勢ひありとなり、是を雷獸といふ。唐土の信州には雷公とて獸あり、それと同じかるべし。甲州など獵師鐵砲にて打といふ。

物集高見氏の大辭林に。獸の名、狀てんに似て、足ながく、嘴とがり、爪まがりて能く木に登るといふ、此のもの常に深山の木の間にすみて、かみな

り鳴るときは驚きて人里などに出づることありといふ。
言海に云ふ、貂鼠に仝し。

雷鳥　隨の同條に、水無月の末にのぼりし人有しに、羽さき丸くして高くとぶ鳥あり、霧ふかくして人聲絶ゑたる折しも、六七羽近けり、東西に立わかれしを、笠をかざし、杖をならして、追ふといへども、甚猛し、終に岩間へかくれぬ。たまたま雛一羽殘す、それを呼聲虫の鳴ごとし、不レ計其の雛をとらへ得たり、大さ鳩の如し、黄脚の高さ五寸計なり、毛色は鶉のごとし、眼上くぼみて丹頂の氣ざし見ゆ、益なしとてやがて放ちやりぬ。此邊を去こと半丁計にして群鳥の鳴く聲、烏の大なる聲にて、山陰にこだましてすさまし、顧れは先の鳥なり、鳴終ると夕立して雷なる、其の夕立の間に又其の鳥なく、なき終るとまた雷なる、依て此邊の人雷鳥といふ。

　しら山の松のこかげにかくろひて
　　ゆたかにすめる雷の鳥哉

右源とし頼歌なり、加州白山に有之雷鳥なり。
或人云はく、これ鳩の類なり云々と
又、此の山に異鳥あり、鷄に似たり、さかはたゝず、尾短く、雄のかたち「シヤム」に似て大さ二尺ばかりなり、黒色に白斑あり、頭に丹頂の肉あり、雌は黄雌鷄に似て胸のうちは黒く白斑有て雄の如く、常に岩穴にすみて、松のみどりを食とす。鳴聲鷄に似たり、雛もともにはやくして、手にあはず、小獸はこの鳥をそれてのがれ去る、此鳥小獸を追ひついばむ折もありと云ふ。美しくたけきものなり。鷹と雄を争ふて、鷹終についばまれ

しとなん。

賀茂別雷大神　諸物の加茂といへる番にあり。また、古事記傳の「たひつぎの考」といふに、山城風土記に云く、賀茂建角身命、娶二丹波國神野神伊可古夜日女一生子名玉依日子、次曰二玉依日賣一、玉依日賣於二石川瀬見小川一遊爲時、丹塗矢自二川上一流下、乃取挿二置床邊一、遂孕生二男子一、至二成人時一、外祖父建角身命、造二八尋屋堅八戸扉一、醸二八腹酒一而、神集集而、七日七夜樂遊、然與子語言、汝父將思人令レ飲レ酒、即擧二酒杯一向レ天爲レ祭、分二穿屋甍一而升二於天一、乃因二外祖父之名一、號二可茂別雷命一。所謂丹塗矢者乙訓郡社坐火雷命在、こはおのれ朝夕に仕へまつれる神にませり。

雷鳴陣　公事根源に　雷鳴の陣とは、むかし、雷の聲三たび高くなりはべれど、大將以下近衞の次將まで弓箭を帶して、御殿の孫廂に候じて、御門を守護し奉りしなり將監以下は、みな、簑笠をして、おなじく南殿の前の庭にさぶらふ。これを雷鳴の陣とは申すなりとあり。

雷壺　禁内殿舍の名、本名襲芳舍。

雷丸　植物にして竹籔の中に生ず。大なるは栗の如く、小なるはむくろじの如し、重くして堅實なり、外がは黒く内部は白し、藥用となす。

雷環　石環なり、上古用ゐしものなるべし。頸玉などのかざりにせしものならんか。

雷斧石　太古の民の刄物に用ゐたるものにて、往々土中より掘り出す一種の石器。質堅密にして形平たく長く、一邊は薄くして刄をなす、斧又鍬に似たり。大小あり、長さ一寸ばかりより七八寸に至る。黒、褐、灰、緑、等種々あり。滑なるあり粗

きわり。かみなりのまさかり、てんぐのまさかりなどいふ(言海)

雷椎 の狀して、石にて製りしもの、尚種々の形あり。こも上古物をうつに用ひしものなるべし。かしこけれど、上古 神武天皇、忍坂の大室にて、尾ある土雲八十建をうちたまへるみうた、

おさかの、おほむろやに、ひとさはに、きいりをり、ひとさはに、いりをりとも、みづみづし、くめのこが、くぶづゝい、いしづついもち、うちてしやまむ、みづみづしくめのこらが、くぶづつい、いしづついもち。いまうたばよろし。とあり。

雷劔 こも石もてつくれるたちにて、上古人など殺せしものなるべし。

これらは、たゞ後の世に、石もて制れるをおやしみ、いぶかしさに、雷の文字をつけしなるべし。

なほ石にて造りしもの石鏃(矢の根石といふ) 石鋺(こは神代などに用ひしものなるべし) 曲玉、管玉、富貴玉、臼玉など、此の類さはなるべし。こは玉葛、頸玉、手玉、足玉などに、すべぬきて用ひしなるべし。

このごろ、人類學てふもの始まりて、石器時代、銅器時代、鐵器時代などいへれど、そは何れの代にも石銅鐵器の類用ゐしなるべし。たゞさはに用ふると、稀に用ふるとのけじめはあるべし。

(をはり)

才くらべ(六)

蓬生屋女史

一九が奇才

その文を見て、其の人を知る。げに一九は膝栗毛の

主人公彌二郎か。さて、酒も充分、夜もあけんとするに、今は掛とりも來るまじと思ひ、いとまをつけ



て立ち出る、ぬりごめの前に、すゑぶろの桶のありけるを見つけ、何れもひけん、この桶かし玉はずやと云ふに、それは易き事、小者にだも持ち行かせんとて丁稚呼びたつるに、否々桶をかし玉へと申すなり、丁稚どなは頼まじとて、其の桶さかしまにしてひきかぶり出で行く、主人をはじめ、ありあふ人々、笑ひどよめきて、之を送りぬ。大つごもりの夜とて、夜もすがら行き來の人のたえざる中を、一九は、ふろ桶かぶりてゆくに、人々をかしかりて、笑ひて道をゆづるもの多く、心なくしたる人は、桶の化者ならんとて、なほ遠く逃ぐるもあり。また、あるは、行きあたりて、このしれもの、心をつけてありけなど罵り行くものあるに、一九、桶の中より、罪は汝にあり、我は桶かぶりて物も見えねばとて、すまし行くに、相手にとるは愚とて、行きかふ人の、皆此方の方をもち行くもをかし。よろめき〱、やう

〳〵家にかへれど、はや元日。一九は居るか、さては昨日はづしぬるよなど思ひ、をかしがりて、昨夜明家に來りし鬼の、他の家よりは殊に笑ひて歸るもめでたし。さて、あまりに寒さにも堪へねどとてよべ、かぶり來りし桶に、若水くみ入れて、みづから火をたき、湯をわかして、之に入りて身をあたゝめけるほどに、日來むつましき近江屋と云ふ質屋の主人の、上下、衣服、きら〳〵しう着なして、初春の禮のべにとて入り來りぬ。一九、よろこび迎へ、酒とり出でゝ、さしつ、さゝれつ、今日は風いと寒し、幸風呂を造りたれど、湯あみし玉へなど強ひてすゝめて、湯へ入れ、破れ屛風にて、桶のまはりをかこひ、其の人のぬぎたる、衣服、上下、うちきて、なほ扇子、腰のものまでとりそろへて、そと、ぬけ出でゝ、其處らわたり、年始の禮云ひありきぬるほどに、湯あみぬる人は終へて、衣きんとすれど、こはそも、衣服も、上下も、主人もあらぬに、さては一九奴、たばかりしよなど思ひつゝ、一九がぬきすてつる衣ひとへきて、其のわたり尋ねありくに、只今來られし今見えけるよなど、行く先き先き返答へぬるに、近江屋はをかしがりて、其の日は、他へも廻らず家に歸りて、此もの語りして笑ひくらす夕つ方、一九は、其處、彼處、めぐり〳〵て、かの質屋に行きて、うや〳〵しう年始の禮のべけるとぞ。をかしき事なほあれど、また〳〵次回にゆづるべし。

笑話

みゝか

一休和尚常に好んで粥を食ひけり、或時某といふ

小ざかしき男來りあはせて伴食したりけるが、やがて和尚に向ひて問ひけるやう、此の粥といふ物は、水の中へ米を入れていとやはらかに炊ぎたるなれど、この文字の樣も、さんずゐに米と書くか、又は食篇に湯などゝこそ書くべけれ、さるを緣も無き、兩弓の中に米を挿みて書くは心得がたしといふに、和尚答へていふ、此の字は子細こそあれ、昔、唐土の聖王、蒼頡等に仰せて多くの文字を作らせけるが、かゆといふ文字に至り、思ひ付き得でさま〴〵に案じ煩ひければ、まづ粥を炊きて群臣にすゝめられけり、されども猶然るべき文字の思ひ出でざるに、王は粥を盛りたる椀の上に箸をからりと置かせられけるに、箸は椀の兩緣の上にまろびて、兩弓相向へる狹を爲しけり、さてこそとて兩脇に弓を書きて中に米をかくことゝはなりにけりといふ、某手を拍ちてあッぱれなる御頓作、さて〳〵何を尋ねても埒あけらるゝ事とて呵々と笑ひぬ。されど、可笑しきに就きてまた不審こそはべれ、笑といふ字は竹冠に犬といふ字を書くは如何なる譯にやあらむと問ひけるに、和尙答へて、これも粥と同じ時に作られたり、わらふといふ字を工夫せむとて多くの人々居並びて、とかく考へ居けるに、庭の方に一疋の犬かしらに竹籠をかぶりて戯れ出でければ、人々一度にドッと笑ひけり、その形に據りて此の字は作り出でたるなりと云ふに、さても所由を聞けど面白き事どもかなと某の感じけるを見すまして、和尚はすゝみ出でゝ曰ふ凡て文字てふものは、悉に理あるものぞかし、日々に用ふる金といふ文字は中にも能く作りたる文字なり、觀音經の中にも金銀瑠璃硨磲などゝ七寶を云ひならべし第一番の金銀なれども、之を持つべき

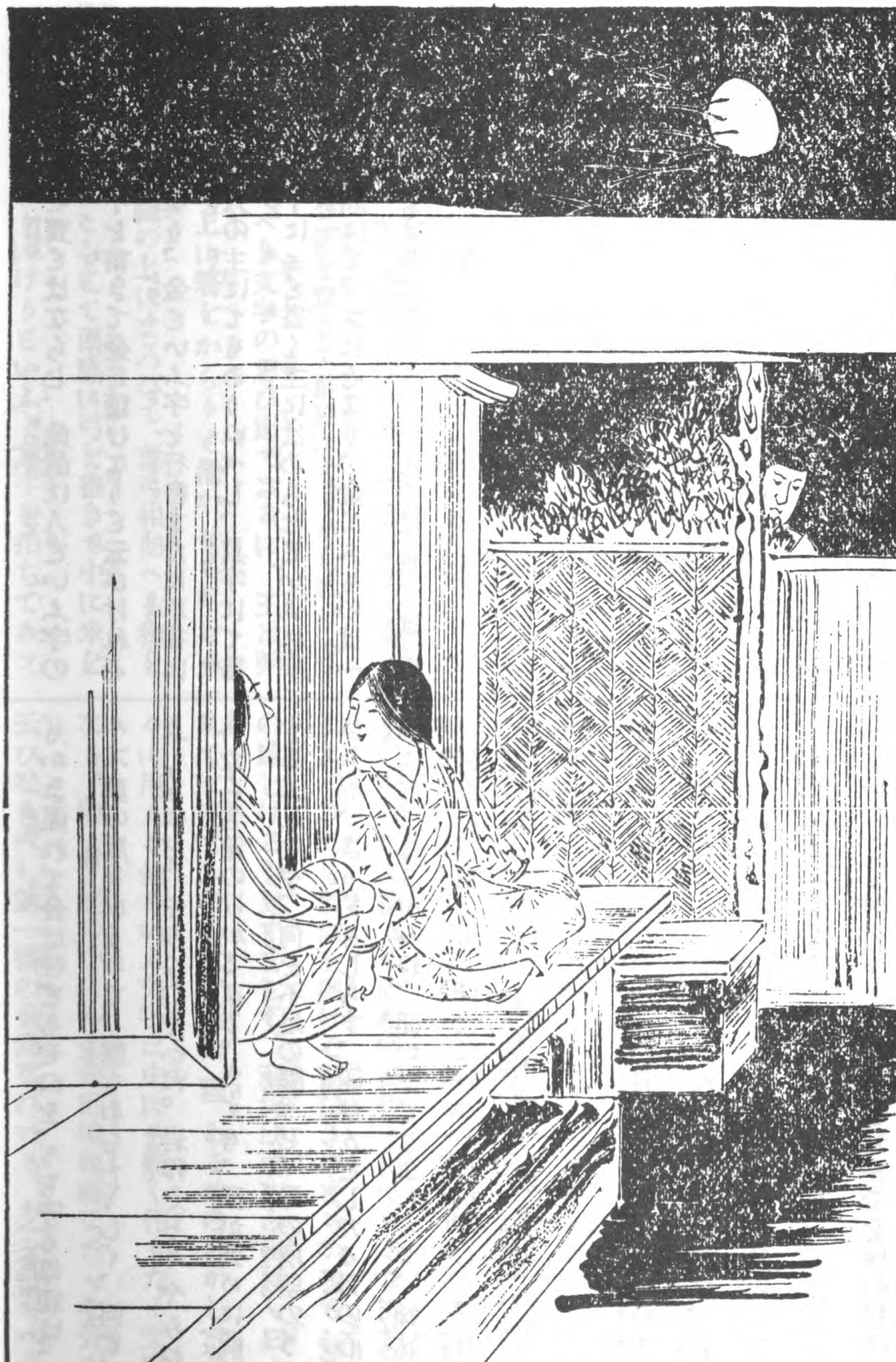
人の持たされた寶とはならじ、此故に人といふ字の下に主といふ字を書きて金と讀むなりと云ひけれど某いふ、然なり、金といふ字を行書または草書にて書く時は、人の主にてもありぬべし、眞字にて書く時は、人の下に亞と書く主にはあらじといふに、和尙は得たり顏にて、されどなり、金てふものは一日も無くてかなはぬ物ながら、死んでは(眞では)要らぬものぞかしと答へけり。

須磨の月 (第三回)

白魚女史

氣色とられては、またもや母が不興をうけんと思へど、姉妹はとゞろく胸をれしなで〳〵て、はや、聲高くふきたつる岩作が笛の音に、合さんとすれど、心は中々にすゝまねど、手も、聲もふるへて、節も調もかき亂れて合はむともせぬを、うち守る母親は、はや不興の眉をひろめて、聲もあらゝかしく、何と云ふしらべぞ、やみね、やみね。岩作そちもやみね。あたら名笛のけがるなり。誰が爲めに祝はするふしぞや、何を不足の調べぞ。母の所望のうるさきか、さりともしらず、祝はんとしたる母の心を思ふぞ。もうやみね、聞かずともよしとて、姉妹が琵琶うぞひ取りて、椽になげつくる折りしも、月は忽ち村雲にかくれて、泣き出さんばかりの空の色、身にしみてあはれなり。

見よや、あのそら、今宵の月は三五の少女が行末をうつすときくに、雲かゝりぬるいまはしさに、岩作そちが名笛に、今宵のそら、ふきはらさせんとせしを、仇人のこゝろには、みなあだにうつりけるか、彼のをかしき調べざま、岩作そちまでをけがしける



よ、いざもはやなかまひぞ、行末はいかにあらむと、彼がなす業望む所。のち松風、おもふ人だに忍ぶや、やみの國に行かむとくるしうはあらしな、など、にがき笑みをこぼし、つと起ちながら、あなや、うき雲のいよ／＼重ねきつるよ、峯の松風何所までもめでとう吹き晴さむやと母はなほこゝろに祈るわりなさに、岩作もう起ちねと云ひつゝ、二人を睨みて去りにしが、これより後は絶えてもの云はず、叱らず、他所のものゝごとくして打ち過さるゝ事も、はや一月ばかりに及びぬ。姉にもまさる妹月、今宵は十三夜、流石に空もすみ亘りぬるに、母が樓上には、侍女などつどひてうたげの聲にぎはしく、岩作が笛の音さへ、かはらず高く聞ゆれど、姉妹は迎へもせられず、母さま月や見給ふとては／＼ながら尋ぬれど、迎へもせぬにと云ひげにそらむきて返答へもせぬ

ど、誰れ一人迎へむとするものもなし、姉妹は恥しさを忍びてまた巳が樓にかへりて、つく／＼とながむれど、さらでも昔忍ぶる月のかつら、そゞろに身にしむ秋の空のはてもなく悲しくなりて、二人、思はずわつと聲たてゝふし沈むもあはれなり。あまりに邪見なる母君の御心、片見月はなすものにあらじとは、よく／＼御承知もありながら、いかになさぬ中とて、あまりにつれなきなされかた、先日も先日とて、姉姫にはあの如きの非道の月見をさせ、また今宵の十三夜、妹姫をもよそにながめさせ玉ふとはあまりなる奥さまの御こゝろのむけ方よと、乳母は悲しく、うらめしく、もとより之も心よくは呼びも迎へられねど、宴の席にもまじらず、巳が部屋にひとりつく／＼音になきけるを、あな、不吉なり、せめては我ひとりだもめでたうかしづき奉らんもの

をとて、きつと涙を絞り、忍びて造る團子の形も大きく、まねぐ尾花の袖をも、紊れぬをと心殊にゑりとりて、笑みつくりて樓上に上りゆく足音も、姉妹は心づかぬばかりに、一心に、亡き母をとぶらふ念佛あはれに、身にしみ亘りて、乳母は悲しく、わつとばかりにまろびて泣けば、たどろく姉妹、これもまた迎ふるは涙なりけり。

あなたぞや、あまりに、涙もろき嫗よ、この空にもあまるほどのめでたき月、祝ひも奉らんとて、來りし甲斐もなく、君たちが御佛をねんじ玉ふ御聲に思はずも涙わきたち侍りて、いし〳〵さへまろばしぬるは、たかしやとから〳〵と笑ひながら、ほんに珍らしき今宵の月たとゝしの今日の今宵もやはり此のごとく光りはあまり侍りたり。げにめでたき月の行末めでたや、うれしや、かばかりてりかゝやく御運の末も思はれて嬉れしや、天つ神、月讀の神、必ず御二方の御運、かくの如くに開かせ玉はれ、いで〳〵姫御、今宵は勿体なけれど、母御にはともあれ、まづ月のかつらをかざし玉へ。あはれ、月よみの神よ、此處のいし〳〵が一番大にて尾花の袖も心も殊にめづらしく祭り奉るなりとて、から〳〵と笑ひて、祝ふ心づくしの程もあはれなり。

文林



庭秋草　東久世通禧

まはらにも植にし庭のはぎすゝき
狹くなるまでしげるあきかな

旅中月　佐々木高行

足からの高ねのつきをかへりみて
むかしをしのふたひの空かな

月浮流水　久我建通

行川のうきもと共にたゝよひて
なかれもあへぬ月のかけかな

雲間月　鍋島直大

村さめの晴てものこるうきくもの
たえまに見ゆる月のさやけさ

秋曉　本多忠貫

有あけの月のひかりはうすらきて
おく露しけきにはのはきはら

湖上月　西三條實義

しかのうみ行かふ舟のかす見えて
波まにうつるつきのしつけさ

はじめて子うませたる人のよろこびに　本居豊穎

玉とこそみかきそふらめ拾ひえし
妹背のかはのなかのまなこは
生ひそめし園の小松やいへのかせ
ふき起るへき根さしならまし

秋草咲みたれたり　宮地嚴夫

さなからに錦と見えておきの野の
千草もゝくささきみたれたる

遠村霧　北郷久政

朝きりのたてるところや打わたす
たなかの村のかきねなるらん

馬上月　鎌田正夫

のる駒のくろかみの上に露みえて
月かけさむくよはふけにけり

水邊萩　師岡正胤

かけ過てまたみどりには流れけり
こきむらさきの萩のしたみつ

都月　岩崎勝従

くまもなく照渡るかなたはきみの
千代田大路のあきの夜の月

夕立　三浦千春

あたご山ゆふたつあめのかさ先に
ふらぬみやこも涼しかりけり

扇　仝

風かよふしみつのもとの捨あふき
なつを忘れてたれかへりけむ

小澤翠岳翁の畫賛　大畑弘國

たらちねの高き御かけを朝な／＼
まつあふかるゝふしのしは山

鈴木弘恭ぬしの身まかられけるよし
弘道の許より告げおこせけるに　三輪義方

夢にたにおもひもかけぬ音つれは
おどろくはかのことなかり鳬

佐倉宗五郎が妻蔦女　佐々豊水

國民のかゝみとこそはめてらるれ
木末ににほふ蔦のもみち葉

英照皇大后御陵に詣でゝ　橘忠照

ひさかたの月の輪山のほとゝぎす
今年は聞くもなみだなりけり

瞿麥帶露　渡邊光風

日の色に咲きにほひても涼しきは
あさ露かゝるなてしこのはな

一行斜雁　足立正枝

山のはを出づるこよひの月かげに
つらをみせても落るかりかな

郭公歸山　草野隆道

世の中をわれもひはなれて山ふかく
かへる空にも鳴くほとゝぎす

をりにふれて　菊地眞澄

外國のふみになつみて皇國ふり
すてゝ學はぬひとは人かは

歌　安齋篤敬

言の葉の花はやまとのあやにしき
幾世ふるとも色やわすべき

心正則筆正　鈴木美貴

鏡よりたゝしきものはみつくきの
ふてにうつれるこゝろなる闌

立秋述懐　木庭芳香

秋立ちて今年もなかばすぎにけり
涙のつゆやおきまさるらん

苔上露　近衛貞子

朝日さすにはの苔ぢのしらつゆは
たまのちりたる心地こそすれ

庭上月　柳原愛子

桐の葉の落はのつゆも見えそめて
つきさしわたる庭のおもかな

旅宿鹿　小池道子

旅ねするみやまのさとの松はらに
つきかたふきて男鹿なくなり

月下薄　北島以登子

さしのぼる月の光にいとすゝき
葉末はなるゝつゆも見えけり

草花未遍　保科節子

八千草をわけつゝゆけは一もとは
　みいでたりけり秋はぎのはな

蘆洲月　南郷柳子
舟とめてあしの中すにうれしくも
　さはるふしなき月を見るかな

荒屋月　中牟田常子
月影のくまなくてらずあきのよは
　われたる宿もすてかたきかな

半出月　鶴久子
よつのをの琴のてやめて半出し
　月にこゝろのひかれけるかな

秋山路　河村重子
さをしかの聲をしをりに分いれは
　やまちも秋もふかくこそなれ

樵路月　服部磯子
山かけにきこゆる歌はしはひとの
　つきにうかれて今かへるらん

藤袴　安藤菊子
秋の野にきて見る人をまちかほに
　ひもとき初めし藤はかまかな

閑談　清水喜久子
思ふどち心もとけてかたる間に
　月もかたふく夏の夜半哉

箱根の湖水をみて　清水靜子
玉くしけはこねの山のみつうみは
　ふしの根うつす鏡なりけり

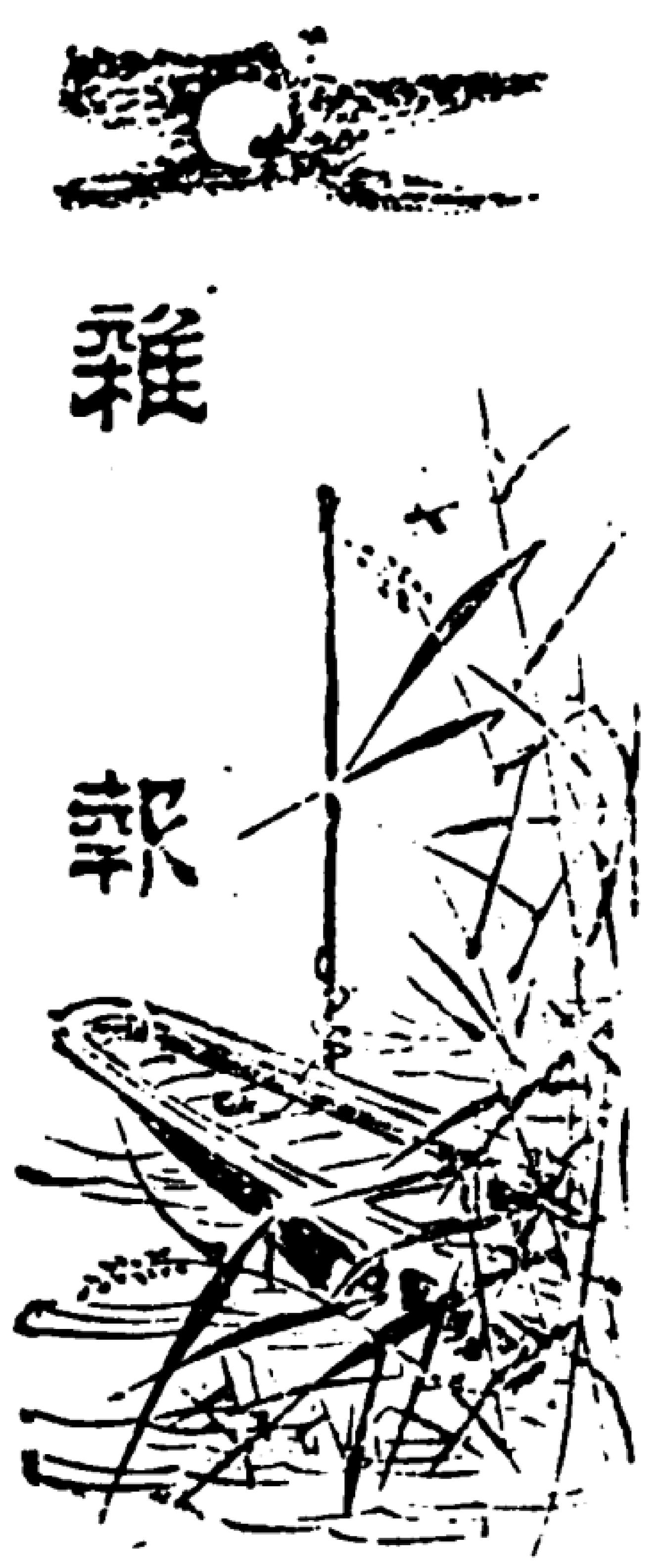
詠美濃國俚歌并短歌
和田正雅

刀自やとじ　いづこに行くか　此の刀自は

朝とくれきて　新しぼり　新酒持ちて　鹿子
自物　婆かひとり子の　初孫の　初顔見ひと
うはきさく　嫁の里かり　わらぐつの　日も
暮ぬ間と　竹枝の　うれしきふしを　若かへ
る　聲のまに〳〵　いつのよか　此のひと歌
を　草笛の　音にもつたへて　わまさかる
田舍の手ぶりを　今に見るかも

反歌

草笛の音にうちそへて一杯に
れともわする丶舌つ丶みかな



雜報

●皇太子殿下御成年式　去る三十一日は、皇太子殿下第十九回の御誕辰にわたらせ給ひて、滿十八年の御成年に達せさせ給ふが、宮中御喪中につき、御式は總て御延引被成、目下。御避暑地、相州葉山の御用邸へは、各皇族、宮內官、及各大臣より御使にて御祝賀申上け奉られたりと。草莽の臣等亦遙に謹み畏こみてことほき奉る。

●兩皇女殿下霧降御成　日光山內の御用邸に御滯在遊ばせらる丶、常宮、周宮の兩殿下には、去る二十二日を以て霧降瀧に成らせられたり。此の日午前六時兩殿下には御駕籠に召させられて御用邸を御出門、小崎日光警察署長先驅となり、御養育主任佐々木伯爵同夫人以下女官八名御附添申上七時半頃同瀑布に御着、更に瀑下に御立あらせられ、暫時御觀覽の後、再び御駕籠にて御機嫌麗しく御歸邸遊ばさる。其瀑下に成らせられし際、小崎日光警察署長は、竹

を伐りて幾條かの杖を製し、之を御附添の女官の用に供したるに、兩殿下には最と珍らかなる御氣色にて、之れを玉手に執らせられ、御歸邸の後は兩杖とも宮內省御用品に供へらる旨の御沙汰ありし由。尙、兩殿下には近き中に、裏見瀑をも御遊覽あらせらるヽよしに承はる。

●僻阪の民皇德を仰ぐ　香川縣小豆郡草壁村にては、先年　至尊の吳鎭守府より御歸航の際、農務の爲め暫時御寄泊遊はされしを榮とし、毎年其當日は奉祝會と稱し、民村相集いて祝盃を擧ぐるを例とせしが、今回又同村字西濱といふ所に、御寄泊紀念碑といふを建設せんとて目下地固中なりと。

●暹羅に在る高岡親王の御墓　岩本千綱ぬしといふは、しばしば暹羅にゆきヽして、土地からもよく知れるものにて、昨年十二月一日、山本鋠介ぬしと共に、仝國のハンコックといふ府を出發し、國內未だ足跡の至らざるラオス森林を通過し、道の里一千三百廿哩を歩みて、ことしの四月九日仝國ハノヱといふ處に、到着したるが、其の途上ラオスの山林にて平城天皇の皇子高岡親王が眞如上人と號し、僧となりて諸國探險の途に上られしに、不幸にして、仝國の森林にて、薨去あらせられし遺跡、及墳墓を發見したれど、我か國に歸りし上、朝野有志の贊成を得て、御墓を修理し奉るべしといふ。

●陸奥伯の薨去　伯は久しく肺患を以て危篤の中に在り、頃日に至り益々衰弱に赴きしが、こと畏こくも　天聽に達し、特旨を以て正二位に進められたるに、遂に、去る廿四日に至りて、薨去せられたり。年五十四。あヽ悼ましい哉。

廿八日葬儀を營む。　勅使日根野侍從を遣はさ

れ、優渥なる勅語、及左の品々を下賜せらる。

一金三千圓　祭粢料

一白　絹　三疋　一干菓子　二臺

一蒸菓子　二臺　一餅菓子　二臺

一菓　物　二臺　一生　花　一對

皇后陛下よりは、山内皇后宮亮を御使としてさし遣はされ、左の通り下賜せらる。

一金千圓　祭粢料

●京都帝國大學の開校　京都に帝國大學を設置せらるゝの官制は、去る本年六月十八日を以て公布せられ、仝日總長木下廣次氏以下數名職員の任命ありしが、爾後漸く全職員の任命終りたるを以て彌々本月十一日より開校せらるべしといふ。

●隅田川を詠める四季の今様　古より隅田川を詠じたる詩歌は數多かれど、今様は甚だ希なりといふ。今、四季の今様を得たれば左にのせつ。

春　橋道守

隅田川原のやかたふれ
あはひさたをもなにかせん
堤の花をさかなにて
ひさこのさけをくみてまし

夏　稲羽美郎

さくらのわか葉花あやめ
人のこゝろもむかふしま
あやせのなみにあやみして
月もすみたの涼しさよ

秋　小杉榲邨

秋はこゝろもすみた川
月にのり都々なかむれは
ふれにしちふろいさの音
波にこかれをちらす音

冬　矢掛弓雄

すみた川原の雪にしき
榊も花のさかりにて
酔に入りつゝさむからぬ
棹さす舟のおもしろさ

●小兒養育器械　と云ふもの、此頃歐洲にては發明されたりと云ふ。此器械に依れば、發育不全なる

小兒の命を、七割五分までは取り返す事を得べしとなり。即ち其器械は、一個の箱より成るものにて、箱は一部金屬より成り、一部は硝子を以て張り、箱の下には臺あり、箱の中には針鐵を以て造れる吊床あり、此上に小兒を臥さすものにして、吊床の下には銅製の管を通じ、之には湯を通はしむ、此湯は別に箱外に備へたる汽鑵より供給するものにて、之を沸すは石油燈を用ひ、又瓦斯を用ふるも好し、此湯の温度を常に適宜にする爲めには、箱内に驗温器を備へ、此驗温器に附加したる裝置に依りて、熱度の高低に從ひ、外部の燃料を加減するの自由を得せしむるなり、先づ小兒を此箱中に入るゝ時は、其温度を血温と同度にし、漸次低下して室中の温度と同等ならしむるに至るものとす。空氣は別に設けたる直徑四吋の管より供給するにて、消毒藥に浸したる布片を其口に懸け、箱内の空氣に有害の黴菌なからしむる裝置をなせりとぞ。

●赤痢病につきての心得　每年秋のはじめつかたは、赤痢病流行しがちにて、最も注意すべき季節なるが、ことしは殊に此の病にかゝるもの多く、全國にて一日に殆んど二千にものぼれりといふ。されど、大日本私立衛生會にては過般來、各府縣の撿疫部、及び撿疫委員をはじめ、流行地方の各町村へ、赤痢病豫防の心得といふ書數十萬部を印刷して送附したる由。此の書の要を摘みて左に示す。

(一)飲料水は必ず一回煑沸したるものを用ゆべし。一回煑沸したるものは冷却後にても差支なきは勿論なり。

(二)食物は必ず熟煑たるもの丶みを撰ぶべし。平生食し慣れたるものならば大概は何にてもよし、唯

熟煮たるものにあらざれば食はずといふこと緊要なり。

(三)食物を洗ふ水は一旦煮沸したるのを用ふべし。盥嗽用の水亦然り、朝一釜の湯を沸し置き節して之を用ふるときは大概一日の用に足るを得べし。

(四)食物の熟煮たるもの食器を洗ふたるもの等は蠅の其上に來り留らざるやう注意すべし(蠅帳に入れ置く等其他尙法あるべし)熟煮たるものも宵越には食すべからず、こは腐敗の虞あり、而して腐敗したるものは消化器を害し下痢を發することあればなり。

(五)上陳の注意必要なるが故に由來の明かならざる食物は(例之他人の家に於て供せられたるもの、若くは贈り越されたるもの等)食ふべからず。

(六)患者ある家には見舞に行くべからず。人情に於て若くは禮義に於て、患者及其家人に同情を表せんがため見舞をなすこと固より美風なり、然れども、見舞によりて毫も病人を輕快せしむる能はず、或は精神感動のため、時に其病勢を重からしむるの虞なしとせず、而して自ら又感染するの恐れあり、他を益する能はずして而も自ら損するとせば其事洵に愚の至ならずや、されば是所情を忍びて見舞を爲さゞること緊要なり。

(七)小兒等を戒めて水泳を爲さゞらしむべきこと必要なり。

水泳其者は小兒等が夏時に於ける遊戯中頗る有益の者たり然れども赤痢病の流行時に當りては往々にして河水中に病毒の流れ來る事あり、よりて感染するの恐あるが故に水泳を避けよといふなり。

●葡萄牙製の小揚子　葡萄牙にて製出する小揚子

は、世界中にて最も良き品のよしなるが、此を製するは、多く農家の少女にして、木は橙樹を用ゐ小刀一本にて削り上ぐに、中〳〵巧妙なるものにて、且木の質もよろしく、恰も象牙の如くして、先の割れなぞすることなしと。されど、利益ある職にて、一日十錢以上の収得あり。米國にては、ろの利益あるを見て、機械にて製造するものあれども、此の葡萄の楊子には及ぞしといふ。

●詠草募集　大敎正佐々豐水ぬし夫妻は、めでたくも、ともに、ことし六十一の高齢を重ねけれど、ろが子たち、ことをことほぐとて、ひろく歌文を諸方の有志に乞はるゝよし、左に之を紹介す。

●水石契久　和歌　和文

父佐々豐水　母小琴子兩名本年六十一の齢を重ねけり、よりて、貴孃各位に儲題の玉作を伏して乞ふ。

玉作屆所　熊本縣肥後國菊地郡城北村大字木野
末女　佐々有隣子
福岡縣筑前國福岡市西職人町
長女　北里繁子

◎女子消息文のはやし　神田同文舘發行　定價四十錢

此のごろ女子のものする消息文を見るに、多くは假名づかひをあやまり、文字を違へ、さまで要なきことをなが〳〵しく書きたて、又文体も、中古文にものするあれば、漢文調になまめけるありていさみぐるし、此れ常に吾人の口惜しく思ふ處なり。此の書は、即、女子消息文の作例を示したるにて、松岡之正ぬしの著、三輪田眞佐子ぬしの校閲せるなり。今之を見るに、其の文悉くうるはしといふにあられども、その体は能く當時の女子消息文に當を得たるものにて、修辭も亦、虚飾に渉らす、卑野に陷らす、中庸を得て應用に適せるは、蓋此の書の特點ならん、卷頭に消息文の變遷、書きぶり、認め方等をからげたるは親切にして吾人の意を得たり。消息文を習練せんとするの女子、一讀するあらば、得る處少々にあらざるべし

◎支那文學大綱　一之卷　大日本圖書株式會社發行

諸家は文學士藤田豐八、大町芳衛、笹川種郎、白河次郎、田岡佐代治の各氏にして、一の卷には、莊子、孟子、韓非子をかゝく、漸次、時代を逐ふて盛衰をゑがき、大家を擧けて發達を示し、以て支那文學の大要を古今に通じて知るに便す、十六冊完成價ひ一二十五錢といふ。

教の庭



九月五日兼題　野邊萩

天　常陸國眞壁郡下館　萩原章子

賤の男もあはれと見しかみちの邊に
　かりのこしたるはきのはつはな

地　肥後國菊池郡城北村　徳永萬壽子

旅ひとはわけまよふらんあきの野の
　みちさきかくすはぎがはなつま

人　下總佐倉　松尾董子

來る人にみちをゆつらむ秋ののの
　小萩かうへのつゆやみたれん

秀逸（十首）

いくはくの人のそてにかふれぬらん　香川潁子
　わけ行く野路のつゆのたまはき

野路ゆけはつゝれの袖もにしきして　吾妻近子
　萩のさかりはうれしかりけり

踏み分けて通ひし鹿のあともなし　松井佳子
　こころれかるゝのべのあさ萩

たつね入る野路の玉萩つゆちりて　名取正代子
　ぬるゝ袖さへ香ににほふなり

萩のはな露さへにほふこゝちして　名取ちよ子
　ふまゝくをしき野路にも有る哉

れくつゆもいろにはへる秋萩に　永井さい子
　わけこそわふれ野邊のほそ道

暫くは分け入りかねてさまよひぬ　三浦鴉子
　はき咲く秋の野邊のほそみち

露わけてゆきかふ人のそてにさへ　梶井久子
　にしきをうつす野路のあき萩

往かひにみすてがたくは匂へども　野木つね子
　たをるも惜きのちのあきはぎ

ゆきかひの人も留りてながむらん　弘田しも子
　ふりすてがたきのちのあき萩

（以下原稿到着順）

はきがはな枝もたわわにさきかはし
　わくるもをしき野べのほそみち　水川里子

をしか鳴く野べの細みちつゆふかく
　にほへるはきのはなさかりなり　佐々有鄰子

萩がはなにほへる野べのほそみちを
　わけこそかぬれつゆふかくして　佐々小琴子

わけゆかむ袖もいろなるみやぎ野の
　あきのまはきはいまさかりなり　佐山茂子

咲き滿ちし野みちの萩をわけゆけは
　はすゑのつゆのたまぞこほる　梅園雪子

いたつらに野への通ひちまとふまて
　にしきしくなりあきはきのはな　福原菫子

ゆく人のころものすそにかゝりては
　かせなきにちるのちのあきはぎ　西艶子

さをしかの妻とふ野べのあきはきに
　なれぬばかりにおけるしらつゆ　矢野みち子

秋のいろけふはさやかにあらはれて
　ふき分く野邊のはきのうはかせ　安井うめ子

ちらさじとかへすたもとに風たちて
　つゆふきおとす野路のあきはき　杉浦よし子

露分けていとひとねたとおもへとも
　なりそわつらふ野路のあきはき　石川頼子

めもあやにはきの花さくこのころは
　野への小みちもにしきとそ見る　石川樂子

けふもまた野への細道分け行きて
　ぬるゝもうれしはきのしたつゆ　石川久子

露おもみこみちにたわむみやぎのの
　はきのにしきにゆきもえやらず　高橋きん子

花におくつゆにゆかりのいろそひて
　にしきうるはし野路のあきはぎ　林瑟子

こゝろなき賤のをさめのひとねたは
　折りやしつらん野路のあきはぎ　竹内まさ子

こゝろなきまくさかる子もあき萩の
　さける野みちをよけかちにして　柚木理子

あきの野は萩のさかりにうつもれて
　そてうちふらんみちだにもなし　瀧か代子

はきの花我か行くみちにさきみちて
　しはしはこゝを過ぎぞかねつる　長山孝子

あきはきの枝もたわわにさきにけり
　ゆきかふ野邊のみちわかぬまで　高島裕子

あきの野をわけつゝゆけは唐にしき
　そてにうつれるはきのうはつゆ　柳田里子

露ふかみあきの野みちをわけくれは
　われもきにけりはきのはな衣　戸塚てつ子

ふく風にたけるしらつゆちりみたれ
　みるにあかれぬあきはきのはな　小曾根ちう子

からにしきあかで野路を行きかへり
　ぬるゝもうれしはきのうはつゆ　池谷富子

野路しめてこれやあるしさ見ゆる迄
　さきほこりたるあきはきのはな　館脇ます子

朝またきひさの行きかふあさもなし
　つゆさへちらぬ野路のあきはき　諸井久良子

宮城野のはきのながみち越ゆくれは
　そてにいろあるつゆかゝりけり　中桐祢子

朝からけ野つらのはきをわけくれば
　いろさろつゆにそでをぬらしつ　綿野りき子

つゆ結ふのへの佷そみち行くひさの
　そてにもうつるあきはきのはな　曽山道子

少女子かそてにやすらんむらさきの
　ゆふつゆふかきのちのあきはき　濱口奈保子

つゆふかきのちの細みち分けゆけは
　そてにみたれてなひくあきはき　中島勝子

錦さもみゆるばかりにはきの　は　な
　のへをうつめてはきみたれつゝ　松原常子

みちさいふみちなきのへの萩のはな
　にはにみるよりうれしかりけり　神田靜子

琛なきのをふみゆけはあきは　き　の
　はなすりころもわれもきにけり　神田樂子

さきたわむはきの花にはさはらしも
　おもへはせはき野邊の佷そみち　楠綺子

つゆしけきのへの萩はら分けゆけは
　すらぬたもさもいろそまりつゝ　野田千代子

此のころはのへもみなから時めきて
　小はきのはなのにほひそめけり　濱口信子

あきののを行けはみちこそはかごられ
　彼方此方にはきの　さ　け　れ　は　小川金子

あきののに千草はあれもさりわきて
　うれたきものはいさはきのはな　小川富子

打ちわたすのべの小みちの萩のはな
　つゆも床しくにほひそめ　た　り　成田常子

たひひさもしはしはこゝに憩ふらん
　はなさかりなるのちのあきはき　町田鶴子

なつかしき色に咲きけりあきはきは
　のへの佷そみち踏みまさふまて　岡田奈美子

露わけて小はきかはらをあさゆけは
　はなすりころもわれはきにけり　美奈非芳子

わけ行けは袖にうつろふいさはきの
　みたれてかなる野邊の佷そみち　粟生喜久子

玉ほこのみちまはりても見てゆかん
　いまをさかりの野邊のはきはら　田中ねん子

ふりはへて行く人しけしいさはきの
　にしきおりなす野邊の佷そみち　日吉あさ子

立ちよりてゆかりの色をおりめはや
　いまをさかりの野路のあきはき　田中ゑん子

朝またき野への佷そみちわけゆけは
　そてにこ佷るゝつゆのたまはき　白石梅子

つゆふかきかた野の小道きて見れは
　かせにみたれてにほふいさはき　白石まさ子

秋の野はみちゆくひとのたもとさへ
　に匂へるはきのはなすりにして　江口さみの子

ほにいてゝまねくな花に立ちましり
　そてひきとむる野路のいさはき　河田いし子

花さけはたわむにみちもうつもれて
　はきのにしきさのはなりにけり　河田ふく子

わけゆけはたまさみたれてちる露に
　いろこそまされ野路のいさはき　原田貞子

ぬるさても野邊のほそ道わけて見ん
　つゆになひけるはきのさかりを　中山かす子

露わけていさ見てゆかんみちのへに
　にしきおりなすあきはきのはな　山田璋子

ぬれぬともいさわけゆきてま萩はら
　わかころもてをはなすりにせん　竹村てい子

露なからそてにやすらんふみわけて
　ゆく野のみちのはきのにしきを　坂田きみ子

ともすれは小萩かそてに目とまりて
　過ぐるにかたき野へのほそみち　山手てい子

あはれ〳〵たづれきて見る人もなく
　さかりすくらん野路のはきはら　金森俊子

あきかせよ吹きな散らしそしら露の
　たまもいろなる野路のあきはき　伊東いそな子

踏み分けて散らさん露さと思へとも
　はらはゞをしき野路のあきはき　伊東よしち子

はきの上の散りなん露の惜しければ
　かけゆきかぬる野邊のほそみち　伊東うの子

秋かせのうち吹くたひにいさはきの
　つゆちる野路は過ぎうかりけり　弘田ゆき子

こゝろしてふみなくたきそ道の邊に
　ひもときそめしはきのはなつま　上野君子

きりふかき野邊の小道のあきはきも
　こきむらさきのいろにさきけり　森ゆき子

ちりもおき人もふまなんいざひさね
　なりてそ行かん野路のいさはき　宮地こと子

ゆふつきに光りをそへておもしろく
　の邊のはきこそ咲きみたれけれ　春野梅子

糸はきのこ匂ろゝつゆに折れふすは
　野路ゆくひとのふれしなるらん　右田藤子

わけ行けはつゆもこ匂れて匂ふかな
　たひの野はらのいさはきのはな　磯野たま子

往きかひの人のたもとにすられけり
　野邊の小みちのあきはきのはな　仁保志磨子

わけゆかはつゆやこ匂れんあき萩の
　咲きのさかりの野邊のほそみち　尾多稲子

あさつゆにに匂ふ野道のはきのはな
　いつまて見れどな匂あかぬかな　石川助子

つゆふかき秋の野路をわけゆけば
そてなつかしきはきのはなかな　植木さよ子

吹くかせにつゆもみたれて小男鹿の
しからみふせし野路のあきはき　植木鋼子

たまはきの花にこゝろのうつろひて
あきののみちはゆかれさりけり　北村學子

紅ここにいろもたかはすさくはきに
あきの野みちはすきぞかれつる　北村左枝子

あきはきの花はにしきとみるまでに
さきみちにけりをののほそみち　北村てい子

秋の野のほそみちつたひわけくれは
をはきのつゆにそてはぬれけり　白井さま子

わけくれは袂もすそもぬれにけり
つゆもたわゝにおけるはきはら　白井さな子

をしかなく野へのあき萩見にゆかん
よしやたもとはつゆにぬるとも　石内さみ子

洲の邊に萩のひとえた咲きしより
こゝろなき身もあはれとそ見る　上島龍子

わけいらは萩のにしきをきんものを
うき世さか野となにかいふらん　富士村識子

行く人ははきのにしきにかくれ野の
たとるこみちもうれしからまし　富士村ひさ子

を鹿ふす野べのはきはと來てみれは
さきもみたれてみちたにもなし　青木春子

あきの野のはきのしら露をしけれは
をれふすえたをよきてゆかまし　秋野小萩子

小男鹿の鳴く音をとめて行く野路に
さらすにしきやはきのはなつま　岩本さく子

思ひきやゆきゝまれなる野路にしも
にしきとまかふはきのありとは　降田まき子

行きかひの人につゆをしふきはれて
うつろひけりな野ぢのあきはき　田部里子

行くていそく身にしあれとも秋はきの
咲けるを見れはたちとまりけり　林常子

秋はきのはなのしらつゆおきとしき
しはしたゝすむのへのほそみち　小森さた子

九月五日兼題　鷹の畫を見て

地

東京青山原宿百四十二番地　大寺浪速子

すべて物の長となれるものは、自らなる品位のなきはあらじ。鳥のたぐひいと多けれど、そが中に、たけくして威あるは鷹なりけり。實に死して穗をつまずてふたとへは、空しからずかし。我が家此頃夏のてる日に、所藏の軸ものをさらせる内に、深雪積れる老梅に、鷹のとまれるかたは、應擧の筆になりて、

見るまゝにれもむきのまさりゆき、書ともれもはゐず、翅ゆたかに、氣はひ高く、まなこの光するどけれど、をぶさの鈴のそれならで、ふりつむ雪に笑きそめし梅が枝をふみ占めたるぞ、威ありて猛からず、いとゆかしき。されど、たのづから風戰ぐにや、つめのあたりに淸き毛のかゝれるなど、こや兼て聞く餘韻とやいふべき、畵工が丹靑の妙はゐゑらねど、此軸かけたる折は、かたへなる油畵などは、旭の前の燈の光失へる樣にて、見おとりのせらるゝぞ、筆のすさびの勝れしならんかし。

人　肥後國熊本市白川新屋敷町堀榮一方　木川里子

たなびきわたりし筒の煙、ややはれゆく黄海沖に、皇軍のをたけびのこゑは波間にひびき、日のみはた光まさりけるをりしも、いづこよりかとび來にけん、つらなる軍ふねの中に、千早振神代のむかし、皇孫の天降りましし山にたとへし高千穗艦のはむしらに、高くやどりし一羽の鷹を、ことさら畵がかれしにつけてれもへど、千萬のますらをが、神のたすけと勇氣もまさりけんほど、いとたのもしくなん。今この鷹は、九重の大内山に。ちかき、四谷の御料地にかはしめ給ふとかや。實にかしこき極みにこそ。かゝるくすしきことどもを寫し畵に見るにつけては、神の御國のみいつのほど、一しほたふとくなん。

(以下原稿到着順)

佐々有鄰子

鷹匠のわざは、むかし某天皇の大御世に、はじめて外國より師さなすべき人をめさげたまひしさぞ、そもそも、此の鳥は、五の德をそなへて、事も武もありさなんいへる、松の操たかき姿を、うつし畵の現にみるものから、朝夕うちむかひては、敵をうろはしくなすなかだちさなり、いにし黄海の海戰のさき、帆柱に飛び來て、皇軍の必勝をしめしつるここなどおもひ出て、いさごゆかしき鷹の畵になもありける。あなうるはしや。

西　艷子

はてしなき大うな原、さかまきよする大波小波、つゝの響さきの聲、さゞろき渡ろ戰のもなか、名におふ高千穗のほばしらに、つばさやすめて、奇しき鳥かな、いざさらへんさ、ものなれたろつはものゝ、ましらの如くのぼり來るを、のがれんさもせで、まなこ鋭く、形容をごそかに、きさ、見たろしたろさまの勇ましさ、實にゑがけるものさしもたほゐす、まして、こを、まのあたり見つる人々の心や、いかばかり勇み立ちけん、思ひ出づれば、はや三年の昔となりぬ、折しも支那さの戰ひおこりて、世の中何さなうものさわがしく、つゝの響太刀のおさ、まのあたりには聞くよしあられど、そがしらせの文、實りありく聲なは、やがて、つゝの響さきのこゑさもきいなさ

れて、心も空に勇みたちつ、ひたすら皇軍のかちを祈りしが、こも其頃、かちいくさの知らせのふみにそへて、送り來しものにして、元より繪のよしあしはしられねども、あまりに事のめでたさに、なほざりならず今にかく、ひめおきつるになん、實に後の世までのかたり草ぞかし、あまたある島のうちにても、殊に雄々敷くいさましきは鷹としきけど、こはまたさるなかの、一きはすぐれて雄々しく勇しき鳥にたやありけん、遠き神代の昔にも、かゝるためしの有りきときく、頭八咫烏の古事などさへ思ひ出られつ、さればこの鷹も、さるたぐひにかあらん、神代ながらの大御國、めでたきことの限りにこそ。

高橋きん子

繪に書ける百鳥の大なると小きとありて、姿の種々なる、羽毛のさまぐ\なるあれど、そが中に、比ふべうもあらぬこのはし鷹はしも、白ふなるも、黑ふなるも、翼尾の正しき清らけく、脛はすこやかにいともく\勢ひあり、姿の生るが如く動くが如く、見めつるまにまに、けに鳥のあるじとぞおもはるゝ、このはし鷹の繪こそ、久方の日こと朝夕みれどあかざりけれ。ましてや、生きたる眞の鷹を飼ふ人は、いかに樂しくあるべきか。

毎日めて見あかぬ人そはしたかの
夢はよろしといひ初めにけむ

綿野りき子

徒然なるまゝ古事の山田の曾富騰と云へる神を思ひ出し、居ながらに與井のよその見ぬ世のかげもがなと、思ひめぐらして、とほつ親より吳竹の世々に傳へられたる繪卷物取り出したるそが中に、あらく\敗紙まきたる一つありき、先づ紐とき心なしつめて打ち見るに、是なん去にし廿七年長月中の七日、海洋島の戰の際、わが日の本のみ舟高千穗の檣の上にまひ來し御鷹を寫したるなりけり。あないさましきすめらもいゝふ、今より思ひめぐらせば、いかめしき要害と聞く旅順口、あるは威海衛など、苦もなく打破り、一擧して北京にまでも進まむ此鷹こそ、千早振る神の前兆にてやありしならん、仰ぎ奉るもいとゞ畏き　大君の御聖德海底の萍居となしはてし支那の舟幾何ぞや、今は御旗の光り八洲の外までも輝きて、安らかに治まる御代にあひし民草の悉如何ばかりぞ、かゝる尊き御鷹の圖など、今までかく空しうしてありし口惜さよ、千代も八千代も鳥の跡久しう傳へ、今な昔とかたる孫子の鑑に、取りあへず表具おこしたてゝ置かまほしや。

佐治ふさ子

秋とは名のみにて、いまだのこれる暑さいとたへがたく、いかにしてくらさばやと思ふ折しも、母上の、けふはいとよき日なり、いで拜この例しなる掛物の虫ほしせばやと、あとらへ給ふまゝに、父上のひさうし給ふ書譜の卷物、あまたとりいでゝ、ひろぐる其中の一卷、かれて音にきこえたる應擧先生のゑかき給へるにて、岩ほの上に、一羽の白鷹、翅をやすめ、いましも心ざす方へ飛びさらんとて、羽根つくろふありさま、誠に我がかたへ來るかとおもはれ、おそろしくもたゞひたすらにながめ居たりき。まことや此鳥、先つ年日清の戰の折、高千穗艦の帆ばしらに來やどりしとか、そもかくやありけんや、世の常の鳥にはあらじといとかしこくも覺ねて、あやしくうつゝ心もなく、ながめ入りつるなりしも、母上のよび給ふにおどろかされてしりぞきぬ。今しばし見まほしきを、かへすぐ\もなごりなしかりき。

弘田ゆき子

日頃お前近うなづさひまつる何がし家の御館に參りぬ、戸次大人の君は、とくより法の奥がを悟り給ひ、はた、から大和の書をさへ究めつ、御齡も八十を過し給ひて御曹子のうち、すべてみやびかなる中に、此度新に調ぜさせ給ひけむ御屏風の鷹の畫書きたるに、先つ目うつされ侍りしに、やむ事なき御手つからさし示し給ひて、これや彼の皇國の軍艦高千穗號により來れりしをもて、やがて高千穗てふ名を給はりける鷹なりと、その事つばらに仰せ給ひつつ、猶かにかくと、其の折の事ども給りたまふをきけば、實にや畫に名高き何がしの、丹精をこらしたるもしろくて、彼れが一度はたたきせば、いや廣きもろこしが原も、ふき靡けつべく、かれが銳き、かれの猛きまなざし、見るからにいよよ姿の物すごきまでなるも、軍人のよき祥なりと喜びあへりし樣も、共に思ひやられて、

日の本の國の譽を高千穗は
　高くもあげむ祥を見せけり

なさかつがつ聞えあげしこそ、いともいともやさしき事なりしか。

右田藤子

或日親しき人の家をおとつれけるに、折ふし座敷にとほりて話すうちにふと、とこのまを見れば、うるはしく裝具せるかけものあり。其畫は、鷹の樹に居る形なり、姿といひ、目といひ、そのするどき、いけるものゝ如きさま、いはんかたなし、思ひしらずさけびつゝ、たれの畫にかととひしに、ある畫師のかけると答へき。畫名をみれば、師の君より傳へきしことあり。この畫をかける人は、畫をもて名をあげられし人にて、天下に畫伯の名をとゞろかし、美術のほまれをあらはしゝこそいみしけれ。

白井さな子

幾千世やへぬらん、いとうものふりたる松が枝高く、打はぶく一羽の鷹、するどなる目をいからせ、爪をならし、悲鳴をあげてさけぶ小鳥を片手に捕へて、なほあかぬがほに顧る樣のおそろしさよ、いづ方にとびゆくらんと打まもるに、こゆるぎもせぬは、いと古びたる軸にゑがきけるものなりけり。あはれ妙なる筆のあと、造化の功を奪ひしは、いかなる人のすさびなるらんと、いとゆかしうなん。心のくしぬる時も、この畫を見れば勢つきて、我も今より力を養ひて、高き空にもとびてしかなど思ふに、こゝろのねむりさへさむる心地なんする。畫は第一に骨を尊ふといへは、いたつらに末の事にのみ心をつくしぬる人の、ゝかてかくも妙に眞の樣をうつすべきかは。

田部ささ子

打つみし文巻とりつくろはんと、見もてゆくうち、いくさ舟のほばしらの上に、いかめしく鷹のとまりたるを、兵士の登りて捕へなんとさまの畫きあるに目とまりぬ。これなん、某の年、皇ろぎの、あだし國を事向け給ふとき、かちいくさのしるしと天がけりきて、高千穗てふに止りたるなる。やがてあなめでたと、うへにもおぼしなし給ひて、九重の雲井深く召させられ、今もなほ飼ひ遊ばせ給へりとぞ、古し昔は神大倭天皇日に向へばさがなしとて道を變へさせ給ひ、八咫烏黃金色の鵄のさちなはさせ給ひ、今また西に向はせ給ひ、鷹のしるしを得給ふなど、思ひ出づるにつけ、皇國のいと〳〵かしこくすしきことの、身にしみければ、

いかめしき鷹のしるしぞ古しへも
　今もかはらぬ神の幸なる

さても、竹園中務卿邦永親王御家督さうぞくの後、幕府へ御對顔のため御下向ましまししかむ、長子爲誠も水戸よりのぼりわひて、久別の情をのべ新會のよろこびを催しつゝゆるやかに休息す。

四月朔日　この頃予が下向のよし、いかにしてか水戸侯宰相中將綱條公の高聽に達して、御對面あるべきよしおほせ下さるゝに、今は世外のかたゐ翁、なにゝか營中にまうのぼり侍るべきといたく辭したてまつれども、時宜いなびかたくて、けふしも小石川の邸にて拜謁す、御嫡少將殿吉孚君も出させ給ひて、らうたげなる御よそほひを見まゐらせつゝ、老の皺ものべる心地ぞし侍る、執事中山備前守をはじめ、いしく／＼出あひて、御饗應ねんごろなるあまり、御壺の山水を見せさせ給ふ、この御壺は、京江戸にも亦たぐひなききこゑありて、故東福門院御在世の時、圖にうつして御らんせられし、折ふし仙洞後水尾院にもうち／＼叡覽ましまし／＼て、御感賞れはしましけるとぞ、まことに、山をたゝみ岩をかさね池水の心ひろさ、なかれをひきて苗代小田にたゝへ、嶺の櫻の木末をまじへたるは、吉野初瀬にかたどり、清水ながるゝ柳かげには、しばしとて立とまりぬべく、楓江の洲崎は、たつた川の秋を思ひやらるゝ、簾をかゝげては雪見の亭、瀧をきくには音羽堂、そのほか孤山の梅、剡溪の舟、からにやまとに名にしれたる所々をうつさせ給ふさ

まつたなき筆には得も書きつくすまじうなん、げにも故中納言殿頼房卿の御時きづきはじめられて、西山殿中納言光圀卿さらに好事の心匠をそへられ、當代に至るまで年月ふりたるしるしにや、老杉古松みどりをふかめ、珍禽奇獸なれあそびて、あたかも深山幽谷にまよひ、孤村荒野にあそぶ心地して、さらに城市のいそがはしきをしらず、かの漢家の上林苑、六條の河原院などを、ものゝためしにかたりつたへ侍れど、ろもかうやうにれくふかきかまへには侍らじなどれはゆ、予をみちびきたるこれかれ、しきりに一首とうなかし侍れど、例のかたはらいたき言葉もて、いかゞは佳景をけがし侍らん、たゞふる里にかへりて、千年山の山かつにかたりきこえん時のことぐさにとて、心のうちに

　幾とせの月にかすみに庭ふりてみ山れはゆる風のれとかな

ひねもすの勝遊を謝したてまつりて、たそがれ時に旅窓にかへりふしぬ。

四日　そらこゝろよく晴たり、けふは江戸をたちて水戸にれもむく、爲誠あないして鹿島、香取など巡禮すべしといふ、角田川をわたるに、をりしも渡守、はや舟にのれといふこそをかしけれ、かのはしと、あしと、赤き鳥は川の洲にあり、

　みやこ鳥いまも川瀬にありはらのむかしのあとをとへもこたへぬ

待乳山、庵崎なども此わたりなり、家隆卿の歌に「月かけのさすや庵崎すみた川こゝて待乳の山のかいより」とよまれたり、行徳といふ所にて舟よりあがり、かまがへ、八幡などをすぎ、市川のわたしを左に見て、下總の國府の臺へのぼる、こゝは天文のいにしへ、北條氏康八千の人數をもて、兩上杉八萬の大軍をやぶりし古戰場なり、萬骨かれて一將功なりしその子孫さへたえはてゝ、むなしき名のみつたはれるこそいたはしきさまなり、總寧寺は道幻和尙の開基とかや、境しづかに、寺ふりて、いと殊勝なり、寺前の馬場よりひがしは、小松原みどりをたゝみて、かすめる空につゞきたり、西をかへり見れど、江戸おもてはるかに見わたさる、南はづれよりすぐに眞間山へわけ入りぬ、本堂よりはじめ眞間の井、手兒奈の明神など參詣して、繼橋の舊跡をたづぬ、みなふるき名所なれど、もだし得ずして例の、

かよひこし手兒奈のちきり絶えはてゝ名のみむかしのまゝの繼はし

夫より、田つら岡山をこえて、日蓮宗の談所中山寺へまゐる、これもものふりてたふとき境地なり、此のほとりをすぎてやう／＼行けど、かぎりもしらぬ廣野なり、南は佐倉領へつゞき、北はこかね原より下野の奈須野へつゞけるがゆゑに、四十里野といふ名を得たり、野駒どもおのがまゝに草をはみ水をのみて、その眞性を得たるさま、馬蹄の

篇を繪にかきたらむこゝちぞする、都ちかき國には、見も聞もおよばぬものながら、又なき見ものなり、世にほだされぬ我が身のたぐひに思ひあはせられて、

はる〳〵と野もせをひろみすむ駒のこゝろもおなじ身こそやすけれ

こよひは白井に宿す。

五日　木おろしといふより津の宮まで、十六里がほど舟にてくだる、河おもてに、洲濱ところ〳〵さし出たるに、水鳥のさま〳〵なる、行かひあそぶさまのおもしろきに、舟子どものだみたる聲して、何事にかあらん、おのがしゝかたりのゝしれるも、聞きしらぬものゝいとをかし、津の宮にて舟よりあがり、十餘町をへて香取へまゐる、これは經津主神をあがめたてまつれるとかや、宮だちいとけだかく、千木鰹木ものふりて、げにもゆゑあるみやしろと見えたり、下向して津の宮にとまる。

六日　舟にのりて息栖(イキス)の明神へまゐる、是は鹿島の別處なり、こゝよりかし田の大舟津うちわたりて見れば、一の鳥居海のうちへさし出でゝいとたかやかに作れり、二の鳥居また十八町があひだつまさきあがりにのぼる、此のほとり禰宜の家々あひつゞきたり、三の鳥居、樓門などをいりて神前へまゐる、本社、幣殿、直會殿、神樂所、竈殿よりはじめて嚴重の大社なり、當社武甕槌神は、ちはやふる神代のむかし、香取の神とともに、

高皇産靈尊の敕をうけて此の界へあまくだり、さばへなす惡神を誅し給ふ、ゆゑに此のあしはらの中津國は平らけくやすらけくをさまれるよし日本紀に見え侍れば、我が國開闢の神功ことにすぐれたまへるとかや、予がわかき時さへ思ひかけざりし廣前を、老後にをがみ奉るもふしぎの御契りあればなるべし、

　ちぎりあればこの秋津洲の東なるかしまの神にたむけをもしつ

爲誠もよみたてまつれり、

　鹿島潟よせくる浪のしらにきくこれもたむけは神のまに〱

かなめ石は社のうしろにあり、石の形はぬり桶といふものゝ如くにて、色は青黑石頭に窪あり、神槌にて打こみたまふあとなりといひつたへ、めぐりにいがきをゆひ注連をひきたり、これより半里ばかり南の山の中に木ふかくかこひめぐらして、たとへば内侍所などの如く作りたる所あり、これなむかのゝ御齋と云、むねたる禰宜のうちに、未嫁の娘をえらびてまゐらすとぞ、かの齋宮のいにしへもかくこそと、かう〱しき、身にしむばかりにおぼゆ、高間が原といふは、東社の東へ廿町あまり白砂浩々としてやゝこたかき所なりそれより濱の方へ流あり、末なし川と名つく、その流にしたがひてくだり見れど、げにも水の末いづこともなく絶えて、まさご地、海につゞきたり、濱

邊にうち出てゝ見れど過こしかたの南海とはさまかはりて風すさまじく浪たかうしてまことに東極のわら海なり、

かしまがたれきつしほ風吹きどよみこゝろくだくるなみの音かな

碧の波漫々たる沖の方に帯の如く一筋白く見ゆるはいかにやと案内せしをのこにとへど是なむ沖の中川と申してうしほの中によのつねの水ながれ侍り遠國より渡海の船中に水たえさふらへはあの流をくみたくはへ侍ると答ふげにも歌連歌にてこそ聞れよひつるをまさしく見侍る事のめづらかに覺えて、

舟よせて汲もしらむやかしま潟沖中川の水のこゝろを

なほ磯づたひにかひつものひろひ海水をむすびてなめわぢはひなどしつゝゆく〳〵日もやゝれちがたに飯島といふ里にいたりて賤が茅屋にやどりをもとむ。

七日　飯島をいでゝ汲上なつみ大貫などいふ浦々をつたひくるに次郎爲明大貫まで出でむかへてたいめんしつゝ破子(ワリゴ)などとりいでゝかみなかしもにさかづきすゝめやゝ時をうつすそのほかしたしきかれこれよりも此所まで茶酒餉などこゝろ〳〵にたくりていとゞにぎはしさかさなり醉のうちに大貫のわたしをこえ靈が崎猿子田などいふ村々をすぎて水戸府につきぬ府城の御構よりはじめ士林の第宅市町の

にぎはひ、これもまた一都會のゆゝしきは、尾州の名護屋、紀州の和歌山にあひおなじ、されど、此の三府は、御當家の宗室として世の人御三家と稱し、天かしたの御かためなりとかや、翁もわかきほどに、尾陽、紀陽は見侍りぬ、水戸は此度はじめて遊ぶ地なれど、今ひとしほめづらかなるに、柳堤といふ道は、時しも新柳の木ずゑみどりをまじへて、半里ばかりつゞきたり、右左は池水ひろくたゝへて、蓮のうき葉やゝひらけていときよらかなるに、水鳥あまたむれあそびて所を得顔なり、堤をゆく／＼梅戸といふところにいたり、爲誠が家にいりぬれど、市川味禪翁（爲誠が婦翁也）枡子、定輔をはじめて、そとこも女も、したしきかぎりにきはゝしく出むかへたる中に、愛嬌おほきうなゐこども、いさましくはしりありくを、あれはいかにとゝへど、みなかねて名をのみ聞き及びたりしむまごらなり、かの晋の王質が仙境よりかへりて、七世の孫にあひたりしもかくぞとよろこぼしきものゝ、又なみだくまるゝも中々なりや、こよひはたがひにめづらしく、よろこびにことぶきをそへて、夜ひと夜酒のみつゝ、長途のつかれをもわすれてかたりあかしぬ。

此度の紀行これまでに書きをさめて、今は、はやながきがたみにとて、子、甥にあたへ侍りつるに、在水戸のあひだ、折にふれたるこしをれ歌、またはめづらしき舊迹名所を見

めぐり侍りし事など、ふるさとにとゞまれる子どもに見せ侍らんとて、更に筆をそめていさゝか書きつる事になりぬ。

京より、三月廿四日の文ども多き中に、ある人の御もとよりおほせ下されし、

　ふじのねの雪にも思へ九重のみやこは春の花もしら雲

御返事たてまつるとて、

　れもふその都の花のにしきにはたちも及ばぬふじの白雲

十五日　宰相殿、少將殿より時服なにくれとめぐみたまはせしなん誠に養老の御心ざしいともかしこまりぬ、子どものよろこびて、さいはひに秋の比故郷へ歸らん時、にしきのたもとになそらへ侍れなどいふを聞きて、

　今はこの錦もあやな墨染にかへぬころものうらみこそあれ

十六日　東照權現の御宮へまゐる、府城の西南五六町ばかりに岡山あり、靈松山と名つく、松杉しげりものふりて、おのづから如在の境地なり、あけの玉垣石のきざはし、丹靑のいろどり、花鳥のほりもの、丁寧をつくせる莊嚴なり、げにも府君の御祖神にてましませば、蘋藻のそなへおろそかならぬもことわりにこそ、供僧は、天臺宗五坊、淨土宗三坊あり、毎年卯月十七日は御祭禮なれば、神輿をけふより御假殿へうつし奉りて、田

和漢諸體 **文章速成術**

新奇發明 **習字速成術**

新奇發明 最良新式 **速算術**

此三書は各專門學士の發明に係る今古未發の新術にして十歳以上の者は男女を不問十日間學修せむ普通の文章家書家速算家となるは受合ひ從來心掛けある人は熟練上達天下に鳴るの士とならん

右一冊に附郵税共廿四錢三冊一時に注文の方へは郵税共六十五錢にて差上候◎爲換大坂局宛切手一割增

日本一手發賣 大坂北區老松町二重門西入南側 **石川慈善堂**

生田目經德編

標註 **雅文消息集**

全一冊 定價金二十五錢 郵税金四錢 (郵券代用一割增)

本書は專ら心を用ゐて古人の消息中より高尚にして雅馴なるものを採り四季雜の各部に分ち參考者の便よからんことをはかれり國文を修むるもの一本を坐側におきて摸範となさむ益を得ること大なり

東京京橋區築地二丁目廿一番地

發行所 **國光社** (電話本局八八)

女學雜誌

明治三十年八月廿五日發行

第四百四十八號

◎社說 那波氏の感恩講

日本女子大學校の組織幷に大阪に設置する理由　成瀬仁藏

◎女學 貞婦を論ず　鷗村子

◎隨感 祇女祇女佛のさとり(下)◎山花われを待ちぬ◎征衣を干蘭盆に染む◎幽明一家の交

唯信是唯樂　落花溪人

◎評論 年少なる國家　曲浦

◎敎育 帝國大學卒業生の官途志望に◎六年間の帝國大學各分科卒業生數◎紳士の隱藝◎學校の衞生◎敎育不振の罪◎學田の寄附◎臺灣及流球の國性化◎世界主義と國家主義

逗子のやれ貝　紫堯山人

◎雜錄 海士の刈藻(鎌倉の里◎六代御前の墓)　長汀子

◎次號 第四百四十九號(九月十日發行)豫告 口繪としては、十九世紀の最大奇跡と稱すべき白痴敎育法の開祖故セグイン氏の肖像を掲げ、なほ同氏一世の鴻業を畧述せる史傳を載す ◎◎◎◎

毎月二回 十日 二十五日發行 一部定價金十錢◎半年前金一圓十錢◎一年前金二圓

發行所 東京市麴町區下六番町六番地 **女學雜誌社**

八月二十日第五號發刊

女子[illegible]母

口繪 ●奥州三春子育馬三種木版●希臘婦人肖像寫眞銅版 女子之友 敎育の効果を收めんと欲せば賢母を養成せざるべからず(文部省書記官寺田勇吉) 家庭 食物のこと●作法●點茶●紐結び●奥州三春子育馬 史談 孟母(文學士大町桂月) 學藝 後三條院(華族女學校敎授阪正臣)金玉集講義(宮內省御歌所大口旅師)●童話 童訓泰西兒(蘭溪女史)●教育 小兒心理學(文學博士元良勇次郎) 小說 時弊(ひとつは) 漫錄 珍奇なる統計圖(女子高等師範敎授野口保興)●我邦女子風俗の遷(帝國博物館歷史部小杉榲邨)●四民●闇夜の月●今樣の茶口に若し●スーシルバン王の逸事●日用文に就ての小言● 文園雜報

定價 每月二回發刊 一冊金八錢●六冊四十六錢●十二冊九拾錢●二十四冊一金壹圓八拾錢●郵劵代用一割增(但五厘切手)全國無遞送料

發行所 東京本郷元町二丁目三番地 東洋社●大賣捌所 東京堂●北隆館●東海堂●田中書店●尾呂志屋

八月十八日第五十二號發行

日本赤十字

定價 一部金八錢 六冊前金四十五錢 十二冊前金八十六錢 全國無遞送料

本誌は日本赤十字社の機關として唯一の雜誌なり●本誌は五十號より大に面目を一新し益々赤十字事業の普及發達を翼賛せん事を期す●本誌の記事は斯業に關する直接の事項の外軍事教育慈善衛生實業文學等其他間接の關係を有する事項を網羅す●本誌は單に本社社員のみならず軍人學生教育家實業家等の必讀すべき良雜誌なり

發行所 東京京橋區築地二丁目二十一番地 日本赤十字發行所

孝明天皇御遺德

先帝御製（東久世伯染筆）挿入　全一冊定價金二十五錢　郵税金四錢

恭て按ずるに先朝孝明天皇は曠古の明君なり不幸にして**事蹟**尙湮晦に屬し**聖德**未だ外に露れず是れ頗る憾むべしと爲す此書は宸翰秘書及び先朝に奉仕せし雲客月卿諸官人の**實歷談**に依り以て汎く**逸事遺聞**を網羅したるものにして庶幾くは聖德の萬一を發揮し奉ることを得たりと信ず

今此書の一班を示せば先づ**御一代**の章を掲げ編年體を以て降誕より崩御に至るまでの事迹を示し**聰明**の章に於て先皇の英明絶倫なるを概說し**夙成**の章は御幼時の御言行を示し**慷慨**の上編は醜夷掃攘の事、其下編は皇權回復の事に痛く叡慮を惱されたる事蹟を叙し**孤憤**の章は獨り至尊をして社稷を憂へしむの實情を寫す**撫御**は識見卓出の實際を明にし**豁達**は言路洞開の聖德を輝かし**忍耐**は禁裡荒廢供御菲薄にして時に或は十兩以下の御座用金に窮し給へる等の例證を示し**仁愛**は惻隱仁恕の御心甚だ厚かりしを明にす、而して前數章に配置する能はさりし逸事遺聞は總て之を**雜事**の一章に網羅し以て先帝の聖德を頌し奉る

發行所　東京京橋區築地二丁目廿一番地　國光社

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收證を出さす金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月五日廿日發行

定價	一冊	十錢
	六冊前金（三ヶ月分）	五十五錢
	十二冊前金（半年分）	壹圓
	全國無遞送料	
廣告料	五號活字廿三字詰一行	金二十錢

明治三十年九月四日印刷
同年九月五日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人 川崎直衛

東京京橋區南八丁堀一丁目十一番地
印刷人 並木頁雄

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行所（電話番號本局八八） 國光社

金製指環

●瀧和亭先生考案並畫

●野口小蘋先生考案並畫



一號ヨリ四號迄片切彫甲價二十八圓乙價二十三圓●同ホ象眼入甲價三十五圓乙價二十七圓五號ヨリ六號迄薄肉形甲價四十二圓乙價三十三圓七號ヨリ八號迄甲價四十七圓乙價三十八圓●市外遞送料金貳拾錢

◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎◎

指輪は其人の正札なりとは千載不動の名言男女に限らず其指にはめたる指環を見れぞ。其人の性質品格れのづから現はるゝ事。諸君御承知の通なり。なまじひ其品位を劣す様なる指輪は。寧ろ指さゞるが愈ぞかし。强に金の量が重くて、寶石が輝きて、彫刻が奇麗なる計で、品格を上るものに非す。品格は金にて買ると思ふは誤なり。假令ろの價は高からずとも其意匠や彫刻が優美なれど。何と無く氣高く見ゆて。其人までが奥ゆかしく成ること。是ぞ即ち美術の德なる。本堂深く此に意を注ぎ。金製指輪の製作に意匠を凝し彫刻に精妙を竭し、内外の時好に魁して。殊に高尚を旨と致すなれど。優美なるは。勿論瀟洒風流の意氣自然に溢れて。是を指せむ其品格を進め。其人の性情さこそと見ゆるさつと保證いたすなり。願くは一覧して、本堂が諸君を欺かざる事を知し召せ。謹で白す



妙技一等賞牌

時計及寶玉類
貴金屬美術品 商（電話番號本局三百三十三）天賞堂

東京市神田區小川町十九番地（電話架設中）

天賞堂小川町出張所

大阪市南區心齋橋北詰北ニ入ル（電話七三三）
天賞堂大阪出張所

名古屋市本町通玉屋町二丁目十七番戸
天賞堂名古屋出張所

廣島市大手町三丁目六十五番地
天賞堂廣島出張所

熊本市唐人町通上鍛治屋町十番地
天賞堂熊本出張所

長崎市萬歳町上野屋方
天賞堂長崎臨時出張所

北海道小樽色内町越中屋方
天賞堂小樽臨時出張所

（明治二十四年八月四日內務省許可）
（明治二十五年三月十二日遞信省認可）

（印刷所　東京國光社印刷部）